

FD REPORT 2020

FACULTY DEVELOPMENT
MUSASHINO UNIVERSITY



Contents

- 02 学長挨拶
- 03 第1回全学 FSDS 研修会
- 06 第2回全学 FSDS 研修会
- 08 第1回目的別 FD 研修会
- 10 授業評価アンケートを踏まえた学科 FD の推進について
- 14 授業改善小委員会の活動
- 17 学科 FD 実施報告
- 21 研究科 FD 実施報告
- 22 FSDS 検討小委員会の活動
- 23 令和3年度 FSDS 活動計画について



令和2年度 武蔵野大学 FD レポート

総合大学としての 教育研究活動を支えるFDの充実

武蔵野大学学長 西本 照真

本学は平成 31（令和元）年度に大学基準協会による第 3 期認証評価（大学評価）を受審し、同協会が定める大学基準に適合していると認定されました。この第 3 期認証評価では、内部質保証制度がより一層重視され、大学の質保証システムが実質的に機能しているか、教学マネジメント体制が構築され適切に運用されているかを問われました。令和 2 年度の自己点検はその評価と指摘を基に全学レベル／カリキュラムレベル／科目レベルでの内部質保証体制の確認を行い、内部質保証における FD の重要性について改めて認識することができました。

自己点検の中で、本学の教育の質向上のための PDCA サイクルを改めて確認しました。学科、研究科ごとにディプロマ・ポリシー（DP）を定め、それに紐づいてカリキュラム・ポリシー（CP）、アドミッション・ポリシー（AP）を策定してカリキュラム設計を行い【P】、授業【D】の成果は学科ルーブリックや授業評価アンケート等で検証【C】しています。この成果検証に基づき、各学科が次年度に向けた改善のための FD を実施【A】することで、PDCA のサイクルが完成します。逆に言えば、プランを立て、チェックするところまでで終わっては、改善は見込めません。学科で、また全学で、課題を共有し解決策を議論することで初めて次のプランに繋がるのです。このように、FD 活動は重要な役割を担っています。

認証評価においては、これらカリキュラムレベルの質保証の取り組みについて、一定の評価をいただくことができました。しかし一方で、大学院や通信教育部において同等の活動ができていない点が課題として指摘され、令和 2 年度からは大学院（研究科）FD の取り組みも始めました。

また、新型コロナウイルスの感染が広がるなかで始まった令和 2 年度は、「どのような事態においても何らかの方法で学び続ける」を旗印に 4 月からオンライン学修をスタートさせました。5 月には全学 FD として ICT 利活用による授業運営についての研修を行い、いち早く学内における取り組みの好事例の共有を図ることで、全学一丸となってこの未曾有の事態に立ち向かいました。今後も学部・学科での取り組みをさらに充実させると共に、研究科や通信教育部においても、より積極的な FD 活動を推進し、学部同様の PDCA サイクルの確立を目指していきたくと考えています。

本学は、大正 13（1924）年、世界的な仏教学者で文化勲章受章者でもある高楠順次郎博士によって、仏教精神にもとづいた浄土真宗本願寺派の宗門関係学校として、現在の中央区築地に設立されました。昭和 25（1950）年に武蔵野女子短期大学を、15 年後には武蔵野女子大学を設立し発展の礎を築きました。さらに平成 15（2003）年に現大学名へ名称変更し、翌年の全学部男女共学化及び薬学部設置を契機に、大学改革を推進してきました。平成 24（2012）年にはこれまでの武蔵野キャンパスに加えて臨海副都心に有明新キャンパスを開設し、令和 3（2021）年 4 月現在 12 学部 20 学科 13 大学院研究科、通信教育部 2 学部 3 研究科、1 専攻科と 2 別科、24 研究所・センターを擁する規模に至りました。この矢張り早の改革に、学外から少なからず注目を浴びているのも事実です。

近年の教育改革の歩みでは、平成 27（2015）年に学修の質向上とギャップイヤー活用のために 4 学期制の一部導入、同時に 3 ポリシーの見直し、教育課程体系化のためのカリキュラムマップ導入を推進しました。

同年、文部科学省の大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅣ採択を受け、フィールド・スタディーズ（長期学外学修）の推進を本格的に開始しました。翌平成 28（2016）年には、手掛けてきた改革の検証機能を高めるべく、教育の質的評価のための全学授業評価アンケート（毎学期）、本学オリジナルの全学学生生活実態調査もスタートさせ、昨年は全学及び学科・研究科ごとにアセスメント・ポリシーも制定しました。

このように PDCA サイクルの基盤構築を図り、エビデンスに基づく検証体制を整備する取り組みを進めています。

今年度は、アントレプレナーシップ学部、大学院データサイエンス研究科の開設、全学の共通基礎課程の刷新、本学独自の学修メソッド「響学スパイラル（仮称）」の構築と、絶えざる改革に取り組み、加えて、2024 年の 100 周年に向けた中期計画を推し進め、成長、発展に向けて全学的にその取り組みを加速していく年であるとも言えます。

世界に最も近いグローバルな総合大学としての地歩を固めるとともに、全学の力を結集して教育改革、及び教育の質保証を目指す FD そして SD の更なる充実に取り組むべく、引き続きご理解と、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



コロナ禍の実践からハイフレックスモデルに向けて

日本語コミュニケーション学科 藤本 かおる 准教授

昨今のコロナ禍により、学生も教員も通学での学びが当たり前だった状況から、ある意味で「不本意に」オンラインで学ばなければならなくなってしまった。また、期間限定とはいえ、いつまでこの状況が続くのか分からないという大変不透明な状態である。このような背景から、オンライン授業は前提とニーズの違いによる「やらされ感」が非常に強く、マイナス印象のスタートになっているように思われる。しかし、この事象をきっかけに多くの教員がICTを活用した教育を体験し、今後目覚ましく利用が進む可能性があると考えている。

遠隔教育を支える理論の一つとして、「同価値理論」(Simonson, 1999) というものがある。遠隔と対面授業の学習は根本的に異なるため、遠隔学習者と対面学習者には、「最終的には同等の学習体験の集合体をデザインする」ことが必要である。同等とは、対面授業を遠隔授業(オンライン)で再現することを意味するのではない。到達目標や学習目標がある中で、その目標に向かう具体的な方法が対面学習とオンライン学習で異なっても、達成するための価値が同等であるべきだという意味である。

次に評価について考える上で、オンラインテストで教員が不安に思うのは、カンニング等の不正問題ではないだろうか。オンラインテストを行うための現実的な例としては、学生を信用してオンラインテストにする、Zoom等で監視をしながら行う、または考え方を考え変え形成的評価にするなど、様々な方法が挙げられる。しかし、試験対策科目など、科目によっては筆記試験を必要とする場合もあるだろう。どのような方法で評価を行うかを考える際には、そのテスト・評価の目的はどのようなもので、何を測りたいのかというところに再度立ち返って考えてみる必要がある。

例えば、通信制の教育は課題の積み重ねが一般的だが、基礎知識量の定着を測るためのテストが重要な科目も存在する。テスト形式にこだわりオンラインで対面と同じテストをする、不正防止のためレポート対応にするといった考え方があがるが、両者にはそれぞれ問題点がある。前者は評価の目標を実現しようとしているのではなく、テスト形式を再現しようとするだけに留まってしまうこと、後者は今まで筆記試験で設定していた目標が達成されない懸念があるということだ。これでは、そのテストは対面とオンライン授業では同価値になっていない可能性がある。

科目や目的によっていくつかの対応が考えられるが、量

的なものを測りたい場合の対策として、①問題や問題数、提示方法を工夫する②解答時間を制限する③持ち込み可のテストにする、といった3点が挙げられる。①は回答の選択肢をランダムにする、ある専門用語に対する問題数を増やし理解度を測る。②は開始時間を決める、各学生の開始・終了時間を確認する。③はすでに利用されている形式ではあるが、リソースの明記などルール決めをする必要がある。また、形成的評価を工夫するために、場合によってはアナログの手法を利用しても良いのではないだろうか。オンライン授業によって教員が息切れせず、継続していくための仕組みを考えることも、ICTを利用する上では非常に重要である。

現在、対面とオンラインのハイブリッド型教育を柔軟に設計するコース設計モデルを指す「ハイフレックスモデル(HyFlex model)」という新しい概念が出てきている。ハイフレックスモデルは従来のハイブリッド型教育に比べ機器設備が重要になるが、様々な組み合わせが考えられる柔軟性が魅力である。学生の状況、ニーズ、授業目的に応じて対面とオンラインを同時に実施する形式や、曜日ごとに対面とオンラインを切り替えるケースなど、柔軟に組み合わせることが可能である。

また、テクノロジーの選択モデルとして、「SAMR Model」というものがある。テクノロジーの選択、使用、評価の4段階のアプローチであり、代替→増強→変容→再定義と、上にあがっていくほど、より高いレベルの教育と学習が可能になるという考え方である。今回の学びのオンライン化は「代替」の段階で、道具が変更された状態ではないかと考えている。たとえ「やらされ感」だったとしても、ICTを利用して代替したことによって、留学生も含めた学生の「学びを止めない」ことには成功しており、非常に良い対応であったといえる。

今回のコロナ禍により本学すべての教員がオンライン化を経験しており、令和3年度の新しい授業運営の方法に向けてSAMR Modelを高みに持っていく必要がある。まず「代替」の現在の経験を生かし、その一つ上の「増強」を目指すことから始めなければならない。オンライン授業と対面授業の良い部分を組み合わせることにより、令和3年度に向け積極的なハイフレックスモデルが構築できれば、世界に先駆ける教育方法になるのではないだろうか。



学生とのインタラクションを促す

Google Classroom の活用方法

学修者本位の教育への転換「情報必修科目」編

MUSIC 中村 太戯留 准教授

(プログラム担当：MUSIC)

文部科学省では、AI人材育成の一環として、学校教育を受ける全ての国民が「数理・データサイエンス・AI」の基礎を身につけることを求めている。育成のステップとしては、リテラシー教育、応用基礎教育、エキスパート教育の3つに分かれており、リテラシー教育に関しては大学教育も例外ではない。

今回は Google Classroom の活用方法について、本学全学科の新生が履修する情報必修科目のうち、「データ・情報リテラシー」(令和3年度より「データサイエンス基礎」に科目名を変更)の授業運営を例に説明を進めていきたい。「データ・情報リテラシー」では、客観的なエビデンスを第三者に示せることを目標として、情報ツールの活用への基礎レベルを学修する。スタッフ構成は、学修者本位の教育を念頭に、各クラス学生 20 名に対して講師 1 名の割合で配置している。

MUSICでは Google Classroom を活用し、標準的なテンプレートクラスとタイムスケジュールを作成しており、学生の学修は 15 分の活動を積み重ねることを念頭に構成している。インプット型の学修では教材ビデオなどのメディア授業を受講した後、その内容を確認テストでチェックする方法を採用し、アウトプット型の学修では 15 分程度で完了するワークを課し、結果を周りの人とシェアする方法を採っている。授業の最後 15 分ほどを使い、その日に学んだ内容を 1 枚の図として要約するグラフィカルサマリーを作成してもらう。これは、学んだ内容の対象化や関係付けを通して、俯瞰的な視点の育成を意図している。

また、Google Classroom の得点管理機能を活用し、活動の積み上げ評価を実施し、学生の学修意欲が向上するよう仕向けている。初回授業で、単位取得要件を丁寧に説明することにより、学生に得点体系を理解してもらい、日々の活動を積み重ねることの動機を与えている。各活動に対して 1 ポイントの得点を与え、活動の積み重ねとして成績が付与されるようにしている。実習形式の授業のため、得点が満点になるまで繰り返し活動するよう求めている。相互評価が上位の学生など、優れた活動をした際は加点している。また、授業中に実施した課題は翌週の前日まで手直し可能とし、何度でも提出できるようにしている。進度の速い学生は手直しを重ねるため、自律的・能動的学修を促す効果が期待される。



オンデマンドでの Google Spreadsheet の操作教育について

学修者本位の教育への転換「情報入学前教育」編

MUSIC 渡邊 紀文 准教授

(プログラム担当：MUSIC)

令和元年から情報科目の入学前教育で行っている、オンデマンドでの Google Spreadsheet の操作教育について紹介したい。情報科目では、新生を対象に入学前教育として、Google社のクラウドサービスの使い方、特に Spreadsheet を利用して数値的情報を扱うための体験と、基本概念のさわりを理解する教育を実施している。具体的には、オンデマンドで Google Classroom、Spreadsheet、Form などの操作、タッチタイピングトレーニングを行う。これにより、入学後に学修する情報必修科目(データ・情報リテラシー、メディア・人工知能リテラシー)の学びの質を高めることを目的としている。

はじめに、学生には教育目的を説明する動画を用意し、21世紀を生き抜く情報スキル、大学や社会での Google Spreadsheet の活用事例、入学後の情報科目において、Google Spreadsheet のスキルを用いて学ぶ内容を説明している。教育環境としては、クラウドサービスである Google Classroom を利用し、入学前に各種操作方法等を学ぶことで、入学後すぐに授業で活用できるようにしている。課題は、学生が自分の好きなタイミングで学ぶことができるようオンデマンド型で提供した。Google Spreadsheet についての動画教材を作成し、学生が分からないところを繰り返し学ぶことができるようにし、演習課題を動画と一緒に配置することで、動画を見ながら自分で操作を確認できるようにした。

また、習得したスキルは小テストで確認するようにした。Google Form を利用した選択式のテストを行い、回答を自動採点し、学生にヒントとともに採点結果をフィードバックして、満点を取るまで繰り返すように指示をした。これにより、能動的な学修意欲を高めるようにしている。

このような取り組みの結果、令和元年度の入学後の Google Spreadsheet のテストでは、入学前教育の受講者は未受講者よりも2割以上正答率が高いという結果が得られた(令和2年度はオンライン授業のため未実施)。令和2年度は各学科平均で8割以上の学生が参加し、理解度確認のための小テストの平均点は 10 点満点中8点以上となった。また、今年度は4月に急遽オンライン授業を実施することになったが、入学前教育においてこれらのクラウドサービスの利用を学生が経験していたことで、オンライン授業にスムーズに適應することができたと考えられる。今後もオンデマンド方式を活用し学生の情報スキルに合わせた教育を展開していきたいと考えている。



未来創造プロジェクトにおける実践教育 情報教育の授業運営について

データサイエンス学科 中西 崇文 学科長・准教授

情報教育の授業運営について、データサイエンス学科で展開している未来創造プロジェクトにおける実践教育を紹介する。

未来創造プロジェクトとは、1年次後期から始まるプロジェクト型授業のことで、学内でのグループ学習だけではなく、企業や官公庁との共同研究などを通じて、大学で身につけたスキルや知識をどのように実社会の課題に活用できるかを実践的に学ぶ取り組みである。1年次後期から3年次に、分野横断的な方法論により実社会の問題に取り組む「ミニ卒論」のような活動で、各自の学究分野への動機を高めるため、学期ごとに各テーマから最大2つのプロジェクトを履修できる。

標準的な1年生のスケジュールとしては、前期にプロジェクトを決定した後、夏季休暇中に取り組みたいテーマを検討する。3学期からテーマの明確化と方針を決定し、徐々に実装、検証を行う。12月頃からポスターを作成し、本プロジェクトの集大成となる学生成果発表会へつなげていく。

1年生から始められるため、テーマを自由に、深くじっくりと選択することができ、自分のやりたいことや、漠然とした将来像を明確化できるメリットがある。また、実装するといふところがポイントで、他の授業で培った知識やスキルを活かし、自らのプロジェクトのテーマにおいて実装と検証を重ねていく好循環が生まれる。この一連の流れで、授業で学んだ内容はもとより、どのように応用していくかを深く学ぶことが可能となっている。

学生成果発表会では、他大学の先生方や企業からの参加もあり、参加者間で活発に質疑応答や意見交換が行われている。学生は自分の研究テーマを外部に発信する意識が生まれるとともに、よりよい発表とするために、自らが取り組んできた内容を整理する良い機会となる。ただ授業で知識やスキルを学んで終わるのではなく、自分のアピール力を培うことができるのは、本プロジェクトの強みのひとつでもある。

未来創造プロジェクトは、自分の興味に基づき、より活発で実践的な学修スタイルを通して少しずつ完成に近づけ、応用を身につけながら実践していく「アジャイル型教育」であると考えている。1年スパンのイテレーションを通じた実践的な学修スタイルにより、学生はどの学年においても、知識・スキルを実社会の実問題に「活かしていく」力を発揮することができるのではないかと考えており、今後もこのアジャイル型教育を推進していきたい。



データサイエンス学科における 学習コミュニティとしての Slack の活用方法について

データサイエンス学科 中村 亮太 准教授

データサイエンス学科では、Zoom、Google Classroom、Slack の3つのツールを連携させ、特に Slack を中心として学生の大学生活のサポートや授業の運用を行っている。Slack はポータルサイトとしての機能を果たし、学生全体への連絡や、学生からの個別連絡、相談を受けている。授業においては、Zoom と Slack のチャット機能を連携させ、グループワークを円滑に行っている。授業に関する通知は可能な限り Slack を利用し、連絡手段を統一することで学生の混乱を避けるようにしている。

本学科の授業はグループ学習が基本となり、70名が10個のグループに分かれ、グループ内で協力しながら課題に取り組む形式をとっている。Slack においてもこのグループがひとつの活動単位となり、教員だけの枠、学生も含めた枠、企業連携や学会で使う枠など、用途に合わせたワークスペースを配置している。

学生にはグループごとにチャンネルが設けられており、メンバーとの情報交換やアンケート採集などを行っている。外部の方が参加するチャンネルもあり、ここで企業と連携を取ることも可能となっている。

Slack の利用状況としては、通常の参加メンバーが174人で、1週間当たり156人が利用している。アナリティクス機能を用いれば、学生別に利用状況を確認することが可能だ。何度も投稿をする学生がいる一方で、全く発信をしない学生の多くは授業に欠席しがちなところがあり、そうした学生をフォローすることに活用できる。

Slack の導入について、教員と学生に簡単なインタビューを行った。良かった点としては、「メールよりもはるかに迅速なコミュニケーションを実現できる」という意見が多く寄せられた。教員は学生に対して簡単にアナウンスができ、学生も教員へいつでも質問ができるという点が評価された。他にも、「活発なコミュニケーションが可能になった」、「外部との連携も簡単に実現できた」などが挙げられた。

一方で、「使いこなすまでに半年以上かかる者がいた」、「休日や深夜に教員宛にメッセージを送る学生がいた」などのネガティブな意見もあった。使いこなすには時間を要するが、通常の使い方であれば1ヶ月程度で慣れると考えられる。また、利用時間のルールを設けること、マナー指導が今後の課題である。

このように Slack を導入するメリットは非常に大きいと考えており、今後は大学全体でも導入され、学科間、教員・職員間でも交流が活発になることを期待している。



SD PBL 科目の全学部1～3年生への導入に伴う カリキュラムデザインと教育評価

東京都市大学 教育開発機構 伊藤 通子 副機構長

学生中心の学びの実現は全世界的な課題であり、東京都市大学では SD PBL^(※) という新設科目によって取り組んでいる。

はじめに、本学の概要と SD PBL の構造についてお話ししたい。本学は共通教育部と7学部 17 学科、2つの研究科から成り、学生数は約 7,500 名である。SD PBL は全学部の1～3年生を対象に計3単位の必修科目として導入した。1年生から順次、各学年に SD PBL (1)、(2)、(3) と設置し卒業研究につなげる構造である。学生には SD PBL を通して、自分にとって価値があることを見つけ、どのように自らの力を発揮できるのか、自分にはどのような可能性があり、どう磨いていけばいいのかを学び取ってほしいと考えている。

SD PBL (1) は「心に学びの火をともしプログラム」として初年次教育に位置付け、(2) で「社会的な文脈の中で学科の学びの立ち位置を理解する」、(3) で全学部混合で実施し「多様なステークホルダーと協働し、自らの専門分野を俯瞰して捉える」ことを設置目的としている。

SD PBL の流れを導入前の試行事例で紹介したい。この授業は、横浜キャンパスの2年生が街中へ出掛けていき、街の未来に向けて何かを提言しアクションを起こしてみるという内容だ。つまり、いわゆる問題中心の解決学習ではなく、地域の未来にとって意義があると、学生たち自身が考えた事柄に取り組む学生中心の学習である。

彼らはまず、大学がある横浜市の都築区役所で区政の現状や将来計画を調査した。1年次に学んだ社会調査の方法を実際に使いながら、関心のある部署にヒアリングをした。次に、これも1年次に学んだ情報リテラシーの知識やスキルを使って、文献やウェブサイト、先輩の卒業論文を調べ、関係機関を訪問して活動の幅を広げていった。その過程で、自分たちの問いを絞り込み、何に取り組むべきなのかについて議論を重ねた。

ある学生チームはもともと地球環境問題に強い興味があり、最初はそこから離れることができなかったのだが、現地調査を繰り返す中で、地球規模の環境問題が、実は都築区の農業問題と関連していることに気がついた。都築区は都市でありながら農業が盛んであり「都筑野菜」を積極的に売り出していた。そこで、都築区の農業の持続可能性を地球環境問題につなげて考え、自分たちが取り組むべき課題を設定した。区役所の方や教員チームとの議論、農家や朝市の方々へのヒアリング等を経て、自分たち若者が「都筑野菜」の存

在を知らなかったことが持続的農業の問題の一つだとした。若者が地元農業への理解を深めるための行動として、オープンキャンパスでのブース出展で都筑野菜の素晴らしさを伝える活動をした（前年度も同様の学生チームがあり、学生食堂へ地場野菜のメニュー提案を行った）。最終的に発表会、レポート作成、そして振り返り会を行い、この活動を終了した。

PBL の流れをまとめると、問題をはらむ状況を示した後、それに関する学生の既有知識を活性化する。状況の調査・分析の中から学生は自分たちの問いを焦点化して課題を絞り込み、それを探究する過程で様々なことを学び取っていく。最後に全員で振り返りを行い、そこで得た学びをメタ的に認知するという流れになる。

続いて SD PBL 創設の意図についてお話ししたい。

平成 30 年度の調査で「学生の教育満足度」を測った際、「体験型授業が少ない」、「ゼミ・演習形式の授業が低学年にはない」などの回答が多かった。さらに、「社会で役立つ力が身についた」への満足度も低く、「後輩に入学を勧めるか」という問いでは特に低学年で「勧める」という回答が少なかった。また、企業向けアンケートでは、本学の卒業生は「優秀」「真面目」「おとなしい」が、一方で「強く意見を主張するタイプが少ない」「人間力のバランスは良いが、切り開いていく力が発揮できていないのではないか」といった点が指摘された。目的に向け地道かつ確実に行動することや、成果が出るまでやり遂げる卒業生は輩出してきたが、これからの社会をたくましく幸せに生きていくためには、一歩前に入るリーダーシップや生産性を高めるフォロワーシップ、チャレンジ精神、現場で活かせる国際性や教養が必要となる。そこで、SD PBL によって、このような能力強化を実現しようという合意に至った。

現在、本学では、中長期計画『東京都市大学アクションプラン 2030』を掲げ、100 周年を迎える 2030 年に向けて様々な改革を進めている。これまでに CAP 制、科目のスリム化、クォーター制、アクティブラーニング化、教育・学修プロセスの可視化に取り組み、さらに、数理・データサイエンスの導入、GPA 制度の変更による成績評価の標準化などにより、学修成果を可視化するシステムの構築も始まっている。

このような教育改革施策との相乗効果をねらって PBL を採用した。それは、①4年間の学修の駆動力を生むカリキュラム設計がしやすい②自己主導型学修を促すための授業設計がしやすい③教育改革が見えやすい、という PBL の特徴による。

まず、①カリキュラム設計についてだが、PBL は指導法とカリキュラムの相互補完性によって大きな効果を発揮する学習法であるとされていることもあり、世界的に有名なデンマーク、オルボー大学の PBL モデルを参考にした。オルボー PBL モデルは、通常の授業（コースモジュール）と、課題を探究する授業（プロジェクトモジュール）が並行して進むハイブリッドカリキュラムで成功している。日本では個々の授業を PBL にする事例が多いが、PBL をカリキュラムに組み込むという発想は少ない（医療系を除く）。ハイブリッドカリキュラムは、個々の授業で知識やスキル、態度、価値観などを学び、PBL ではそれらを統合して実践するのである。各授業で学んだものをフル活用しなければ、PBL の質が上がらない仕掛けにより、学生はおのずと熱心に学び課題解決の実践力をつけていく。

本学では、これに倣って、SD PBL を既存科目の成果を統合して活用する機会とし、確かな学力として定着させることを目指している。また、全学及び各学科のディプロマ・ポリシーに直結する重要科目として、形成的なパフォーマンス評価を学年ごとに重ねて卒業研究につなげ、自立的な学習者となっていくことを支援する。

次に、②授業設計のポイントだが、SD PBL は2つの PBL がベースとなる。1つはプロブレム学習（Problem-Based Learning）で、当事者性のある問題や自己にとって有意義な問題を扱うことにより、知識の転移や理解深化の促進を目指すことを目的に組み立てられる学習のことをいう。もう1つがプロジェクト学習（Project-Based Learning）で、現実の有意義な問題に取り組み、科学リテラシーの獲得という目標に有効だとされている。前者は自分なりの問題を見つけるといふ本学の目的と親和性が高く、後者は専門家養成という、大学が本来持っている役割に有用な学び方となる。

本学では、オルボー PBL モデルの原理をもとに、独自の PBL として設計した。具体的には、本学が重視する都市研究というテーマに沿って学生の問いを刺激・鼓舞すること、問題解決に学際性を持たせること、学術理論と実践をつなぐこと、PBL 独自の評価を実施することなどのカスタマイズを行った。

自己主導型学修を促すために、知識の再構成や転移に効果的なプロブレム学習は低学年の SD PBL (1) (2) を中心に配置し、科学的なりテラシー獲得に効果的なプロジェクト学習は (3) に配置する。SD PBL では、学生自身が現実の問題を取り巻くステークホルダーの一人として専門的立場に立って取り組み、自分にとって価値があることやできることを見つけるために、探求を続けられるような授業設計を行う。

続いて PBL の評価について説明したい。本学では学修ログファイルの活用を推奨している。学修ログファイルは学びの

生データファイルのようなものであり、学びの履歴や総和を客観的に見つけ直すツールとなる。学びのプロセスを把握できるため、パフォーマンスの直接評価が可能である。また、全学的な評価システムとして構築しているのが「TCU-FORCE」である。学生が正課・課外で培った経験を WEB 登録することで、学びの履歴が可視化でき、教職員の支援を受けながら「自己理解と成長」を促す学修支援システムとなっている。卒業時には、4年間の成長履歴を証明する「ディプロマ・サプリメント」を発行できるが、1～3年生でも「プレ・ディプロマ・サプリメント」で学びの過程を追えるようになっている。卒業研究と関連科目、個々の科目を「TCU-FORCE」でつなぎ、全学ディプロマ・ポリシーと整合する学びの機会をつくり出すために運用を始めている。

最後に課題と今後の展開について紹介したい。まず、伝統的な学習理論と PBL のベースにある学習理論は根本的に異なるため、教員の役割も含めて学習観を転換する必要がある。また、PBL の基礎力ともいえるコミュニケーション力や、情報活用力が身に付いていない状態の学生に、いきなり PBL を導入しても効果は限定的になる。さらに、評価する力も重要だ。社会で大切なのは評価者の視点であり、他者や自分自身を過不足なく適切に評価できる力である。

SD PBL では、このような基礎力強化をはじめとして、教員の役割、設備環境、授業やコースデザインについて、FD や学内の様々な機関・部署と連携して向上を目指している。PBL においては、ただその形を模倣して行うだけでは、学びの到達目標が達せられないという失敗を招きかねない。本学ではそのような事態を防ぐために、担当教員同士で SD PBL の理念を確認し、各学科の取り組みを共有する「SD PBL デザイン研究会」を結成し、授業デザインワークショップを実施している。また、本学に適した評価やファシリテーションスキルについても、各学部・学科を超えて全学的に検討を進めている。

いくつかの学科では、新たに知識集約型社会を支える人材育成に取り組もうとしている。今後の展開として、このような新しい取り組みを SD PBL の構造の中にうまく織り込んでいき、各学科が強化したい教育を展開していこうと考えている。



※SD PBL=Sustainable Development + Project-organized Problem-Based Learning（プロジェクト・オーガナイズド・プロブレム・ベースド・ラーニング：プロジェクト型で取り組むプロブレム学習）



情報セキュリティについて

慶應義塾大学 環境情報学部 武藤 佳恭 教授 (令和3年度よりデータサイエンス学科 教授に就任)

今日は、情報セキュリティに関する大事なことをお伝えしたい。一つ目はセキュリティの常識、二つ目はリモート授業を行う上での注意点、三つ目は自分でできるセキュリティ対策についてである。

まず、セキュリティの常識について話を進めていきたい。大学ではネットワークを通じて、様々なサービスを学生および教職員に提供している。ネットワークはインターネットに繋がっているため、その先には悪いハッカーも存在する。さらに、自然災害対策への準備も必要となる。台風や地震などの自然災害が発生しても使用できるシステムを構築することが重要で、台風で洪水が起きたため授業ができない、ということは許されない。

皆さんが利用しているソフトウェアには、セキュリティホール(脆弱性)というものがある。これは、悪いハッカーが脆弱性を突いて自由にできる環境をつくってしまうセキュリティの穴のことだ。セキュリティホールは10段階にスコア化されており、大きく分けると「安全」から「致命的」までの5段階に分類される。「致命的」とは、セキュリティホールを利用されると、コンピュータそのものを牛耳られる段階のことを指している。最新のデータによると、致命的レベルのセキュリティホールは1万6,185個存在することが明らかになっている。しかし、これは判明しているだけの数字であり、実際はこの数字より多く存在していることから、この現実を踏まえて運用していく必要がある。

セキュリティホールへの対処法として、アップデートを行うことで、アプリケーションソフトウェア(Wordなど)や、ネットワークソフトウェアなど様々な穴を埋めることができる。通常のサーバーには、サーバーの中を管理しているソフトウェアにも穴があるため、それら全体を埋めるためのコマンドがある。例えば、「sudo apt update」というコマンドのスーパーユーザー(管理者)で「sudo」というものがある。どの穴を埋めるかという情報を収集し、アップデートでその穴を埋めていくという作業を、管理者が毎日行っているところもあれば、徹底されているところでは毎時間行っている。これらを今まではスーパーユーザーだけが行ってきたが、個人ユーザーが認識して行う必要がある時代に入ってきている。

日本には情報漏洩という独特のセキュリティ問題が存在する。他国でも情報漏洩はあるが、日本は紙媒体の漏洩が最も多く、約30%もあるということが一番の問題だ。世界ではペーパーレスが当たり前のトレンドだが、日本はいまだに紙媒体ベースの取引をしているため、ペーパーレスを進めることで情報漏洩の間

題は大幅に軽減することができる。紙媒体以外にはインターネット、電子メール、USBといった媒体で情報漏洩が起きている。

大学のネットワークサービス、インターネットサービスを全てクラウドソーシングしようという動きがあるが、実はクラウドソーシングも安心できない。最大手のアマゾンウェブサービスは、大規模な障害によってサービスが止まるという事態が頻繁に起きている。そのため、常にクラウドソーシングなしでもやっていける状態にしておかなければ、大学のサービスとしてはふさわしくない。

さらに、ハッカーの攻撃対策も必要だ。悪いハッカーがいるという前提でシステムを構築しておかなければ、大学のサービスを提供できないどころか、情報漏洩を起こしてしまう可能性がある。攻撃対策をする上で重要なのは、二重の準備をすることだ。通常、学生は大学で電子メールの登録をしており、リモート授業の場合は、教職員が連絡先やアクセスURLを電子メールで提供する。しかし、問題が発生し大学のメールシステムが利用できず、授業のURLを受け取ることができなくなると、その学生に不利益が生じる。こういった事態を避けるために、最低でも二つのアドレスを登録し、①が駄目であれば②のアドレスに、あるいは同時に2カ所送る必要がある。

また、リアルタイムで授業をすることが一番大事ではあるが、そのためには授業を記録する作業や、報告書、レポートなど様々なファイルが存在する。それらは全て、最低でも1日に1度、可能であれば1日に2度バックアップを行っていただきたい。さらに、バックアップ先は2カ所以上が望ましい。

大学、企業にかかわらず、悪いハッカーがシステムに入り込みファイルを開けたとしても、そのファイルが何であるのか分からないように、最低でも二重にして暗号化をする必要がある。これは、一つの暗号であれば、少し時間をかければ中身を開けることが可能なためである。二重にしても時間をかけて開けられるかもしれないが、そこまでするハッカーはそう多くはない。

今から実際に、ブロックチェーンで使われている「SHA-256」という暗号の復号デモを行う。これは、本来は分からないはずの中身が分かってしまうという実演だ。仮に「musashino」という単語を入れて暗号化する。単語に対して、256のハッシュ値が生成された。通常このハッシュ値は一方向関数と呼ばれ、元の「musashino」という文字列を出すのは非常に難しいとされているため、仮想通貨などの暗号化で使われているのだが、実際はどうだろうか。今からその復号にチャレンジしたい。復号化ツール「Hash Toolkit」で、このハッシュ値を入力し、これ

が「musashino」という文字列に変換できるのかどうかを試してみると、たった 0.1 秒で「musashino」を復号してしまった。このように、一つの暗号だと簡単に復号できてしまうため、皆さんのシステムでは最低でも二つのキーワードを使っていたきたい。ユーザー名は外から見えてしまうため、パスワードが1個では簡単に破られてしまうのである。二つのキーワードを使うだけで、かなり強固なセキュリティになる。

大学が提供しているサービスのセキュリティで注意すべきものは、サーバー、無線 LAN、キャンパスの LAN の三つである。これらのセキュリティを毎日、あるいは数時間ごとにアップデートしなければ、セキュリティホールを突いて侵入されてしまう。守る側は攻める側に比べてより一層の努力が必要になり、費用もかかってしまうのだが、それを節約するためにはどうすればいいかをご紹介したい。

まず、様々な研究成果や資料は、通常は大学のサーバーに置くと思われているが、インターネット上にも無料のサービスがあり、そこにデータを置くことができる。例えば、研究者向けであれば Google Scholar、資料であれば ResearchGate、他にも GitHub などといったコンテンツがある。ただし、ファイルの大きさには制限があるため、動画であれば YouTube のサーバーを利用するのも一つの策だ。もちろん、大学のサーバーに自由に置けるようにしておけば、二重、三重に攻撃されたとしても、別のコンテンツを案内することができる。これは大学のサービスとして重要なことだ。

続いて、リモート授業を行う上での注意点について、私の体験を基に紹介したい。これはニュースでも報道されたが、この秋学期が始まったときに慶應義塾大学の学事サーバーがハッキングされ、10月1日から7日までの授業が全てキャンセルになってしまった。しかし、大学の学事サーバーがストップしたからといって本当に授業ができないかという、対策をしておけば問題なく行うことができる。私の体験というのは、大学のサーバーがハッキングされてもリモート授業ができた、という話だ。私は10月5日・6日に授業があったのだが、通常どおりリモート授業を実施することができた。なぜ私は実施できて、他の授業はできなかったのか。そこには大きな差がある。

リモート授業にまず必要なことは、学生に授業の URL を知らせることだ。メールサーバーでは実際の宛先と CC、BCC があるが、私は必ず BCC を使っている。学生の機器がハッキングされることを前提に考えると、通常のメールサーバーでは URL が漏れてしまうからだ。そうすると、ハッキングされた学生の機器を使って学生全員にメッセージが送られてしまう可能性がある。BCC を使用しておけば、このような事態を避けることができる。

次に必要になるのはインターネットのアクセスがあるリモート授

業のソフトウェアで、最後はコンテンツだ。リモート授業は、通常の授業の何倍ものコンテンツを準備する必要があり、非常に時間がかかる。これらが最低限リモート授業に必要で、重要なものである。

私は一番大事なメールサーバーを、二重ではなく三重で準備していた。ハッキングされることを事前に知っていたわけではないが、プロはメールサーバーを複数準備している。私の場合は、大学の学事メールサーバー、大学に置いている私独自のメールサーバー、自宅にメールサーバーを用意している。全てがハッキングされていたらリモート授業はできないということになるが、同時に全てハッキングされるということは滅多にない。私は自宅にメールサーバーを用意していると述べたが、個人の自宅にメールサーバーを立ち上げるのは非常に重要なことである。立ち上げ方法が書いてあるウェブサイトがあり、昔と違いほとんど全自動でできるため、プロでなくても簡単に立ち上げることが可能だ。

最後に、自分でできるセキュリティ対策を紹介したい。最近では、ランサムウェアのように元の状態に戻すことと引き換えに身代金を要求してくるマルウェアがあるが、そんなものがあったとしても大丈夫なように必ず頻繁にバックアップを行っていただきたい。皆さんに忠告したいのだが、ブラウザのセキュリティで一番重要な設定は、「履歴を残さないモード」にすることだ。デフォルトでは履歴を残す設定になっており、これが問題を起こしているためである。

また、「変なソフトウェアを入れたら、アンインストールできなくなった」という事例を耳にするが、一番簡単な解決方法は、復元ポイントを利用することだ。Windows、Mac、Linux は、復元ポイントを設定していれば元に戻すことができ、前日や3日前に戻すということが可能だ。大事な自分のコンテンツはそのまま、アンインストールできないソフトウェアだけを消去することができる。

少々厳しい話だが、一番重大な攻撃は「DDOS 攻撃」で、これを受けるとネットワークへのアクセスができない、PC の動作が遅くなるなどし、通常のサービスを提供することができなくなってしまう。この攻撃に備えるためには、二重のネットワークのサービスが必要だ。アクセスを供給している側にそのようなサービスがあるかを確認し、対策をしておくことが非常に重要である。

これは矛盾する話だが、最新版のソフトウェアを入れても、それが最善かどうかはセキュリティの観点からは分からず、前のバージョンに戻す場合もある。最新版が推奨されているが、バグが多く問題があれば、元に戻さなければならない。このようなセキュリティ対策を難しくしているのがソフトウェアの現状であるため、今日お話ししたことを知っているかどうかで大きな差が出る。皆さんは知っているという前提で頑張っていたきたい。

令和2年度 授業評価アンケートを踏まえた 学科 FD の推進について

〈授業評価アンケート概要〉

- 教育の質保証のため定量、定性的評価、学生の実態把握を行う。また、学科の教育改善に資する情報、分析観点を増やし、各学科のFD活性化につなげる
- 原則、全学部・全学科の科目を対象に実施する
- 各学期のアンケート実施期間中の授業時間内^(※)で実施（所要時間約10～15分）する
※令和2年度1・2学期は、オンライン授業対応のため、授業時間外でも実施

■目的

令和2年度1・2学期授業評価アンケート結果を基に、対面授業、オンライン授業の複合的観点から以下を検証する。

①科目のアセスメント：科目ごとの学修成果の達成状況を確認する

- 課題を可視化し、改善策を学科内で共有する
- 授業への主体的参加をより高めるための課題、ノウハウ、スキル共有の場とする
- 授業運営におけるGP（Good Practice）を見つけ出し、教育の質向上を図る

②学科カリキュラムのアセスメント：学科の教育課程全体を通じた学修成果の達成状況を確認する

- 科目の体系性・適応度を検証し、教育改善につなげる
- カリキュラム再編成に向けた検証を行う

■実施内容

実施期間

令和2年11月2日（月）～令和3年1月15日（金）

活用データ（データ内容は、令和2年度1・2学期授業評価アンケート結果）

- 授業評価アンケート基礎集計：各設問の回答結果の学科別基礎集計
- 科目別授業評価結果一覧
- オンライン授業の検証資料
- オンライン授業に関する教員対象アンケートの集計結果、自由記述分析
※参考資料として、令和元年度結果（DP分析）も共有

■実施報告（一部抜粋）

（1）令和2年度武蔵野大学数値目標の達成状況の検証

各学科報告書より、理由が明確に述べられているもの、学科特性や個別の授業の範囲に留まらず他学科の参考となるようなものを一部抜粋した。太字は、特に具体的な対策と思われる箇所。

①授業外の学習時間（全学目標：1科目あたりの予復習時間1時間以上）

<具体的改善案（未達成要因の改善策）>

- その日の授業内容の要点を振り返る趣旨の課題を出したり、反転授業のように事前の調査・考察を求めたりすることが、オンライン授業で日常的に行えるようになり、教員の管理も容易になったことは、授業外での学習時間の増加の大きな要因だと考えられるので、これを継続し一層推進する。[日本文学文化学科]
- 学習者の関心を高める**ということが必要であると考え。講義科目であれば、双方向授業の中で、論点・争点を示し、その議論に参加している実感を与えることができるとよい（そしてそのような素材をうまく選択することも必要である）。[法律学科]
- 出席確認を主たる目的とした課題と、成績評価に大きな影響を与えるレポートとを明確に分けて実施する**等の工夫を行ってきたい。[経営学科]
- 来年度は、①各教員がオンライン授業の手法に習熟し、②オンライン授業と対面授業を有機的に連動させ、③シラバスに準拠した授業を実現することが焦眉の急となろう。[人間科学科]
- オンデマンド動画を授業の一週間前に配信している科目があるが、再生回数は授業前日にしか増えない。**スケジュールを決めて、日常的に学習を行うような仕組み作り**が必要。[数理工学科]
- 学修内容や課題は科目担当者に委ねられるべきことではあるが、**学科全体としてどのような課題がどれくらい出されているのか、情報共有**をしていく必要がある。[教育学科]
- シラバス作成の締切の時点では、対面式講義を想定して書いていたため、実際のオンライン講義とシラバスが必ずしも一致しなかったことは否めない。**3月になっても修正できるような措置があった方が実際の講義にあったシラバスが準備できたように思える**。[薬学科]

②授業の理解度（全学目標：理解できた学生の割合が70%以上）

<現状分析（達成要因）>

- 本学科では早くから非常勤の先生方のご参加を願ってオンライン授業のFD等を開き、先生方それぞれが相応の工夫をしてくださった結果が、この数字に反映されていると思われる。[日本語コミュニケーション学科]
- 多くの教員が、**授業を録画しオンデマンドでも見られるようにしており、学生が繰り返し見ることで理解度が高まった**のではないかと推察される。[教育学科]
- とても理解できた、理解できた、の割合が90%以上であった5科目についての報告と議論を行った。これらの科目はオンラインでの実施であったが、すべての授業において、授業前に、授業の動画・資料を作成していた。**動画と資料によって学修することで、何度も動画を見直すことができたり、また資料を先に読んで上で動画やオンライン授業を視聴することで、多層的な学びが可能になり授業の理解度が深まった**のではないかと考えられる。[幼児教育学科]

<具体的改善案（未達成要因の改善策）>

- 数学を特に必要とする科目や簿記などの難易度の高い科目では低い理解度となっている。理解度が芳しくない科目においては、**e-Learning 機会の増加、演習問題の増加と丁寧な解説、確認テストの導入とフィードバック**を通して、理解度向上に努める（1学期の様子を受けて、さらなる理解を助けるために、2学期以降は解説動画の配信を実施した科目が多い）。[経済学科]
- 70%未満の科目は、もともとの科目の難易度に依存しているようにも見える。また、資料配布のみの科目では、理解できたという割合が他の科目に比べて極端に低くなった可能性が考えられた。**非常勤講師にも、オンライン授業実施方法について、同時双方向での実施を積極的に依頼**することとした。[社会福祉学科]
- 準備に時間はかかるが、授業の動画教材による**オンデマンド化**をできる科目から行くと効果があるのではないかとと思われる。[数理工学科]

(2) DP検証：オンライン授業における現状報告及び対面授業との複合型授業実施に向けた具体的展開方法 (※令和2年度はアンケートに DP 到達度設問がなく、教員の授業評価に基づく分析となっている)

各学科報告書より、理由が明確に述べられているもの、学科特性や個別の授業の範囲に留まらず他学科の参考となるようなものを一部抜粋した。太字は、特に具体的な対策と思われる箇所。

①オンライン授業下での DP 到達状況：DP1<知識・専門性>に関して

<良かった点>

- 授業映像等を繰り返し視聴できるという点において、オンライン授業にもメリットがあったように思われる。[経営学科]
- オンライン授業は教材の提示がしやすく、意欲のある学生にとっては繰り返しの学習が容易であるというメリットもあり、DP1を達成する上では、有用な手段となる可能性がある。[人間科学科]
- DP1やDP3については、オンライン環境下であっても、ある程度、学びを形成することができた。Course Power や Google Drive 等を活用していつでも学びの資料にアクセスできること、授業を録画し復習できるようにすること、必要に応じて解説動画等をクラウド等にアップして閲覧できるようにしていることなどによって、効果的な学びにつながった。[教育学科]

<課題>

- 知識や技能の修得を確認する最も基本的な手段の一つである「試験」がオンラインでは実施しにくいという点が課題として挙げられる。[経営学科]

②オンライン授業下での DP 到達状況：DP2<関心・態度・人格>に関して

<良かった点>

- 学科科目においては、Zoom のブレイクアウトルームを効果的に使って、固定されない他者と議論したり考えたりすることで、知識・関心度を効果的に高めることができた。[日本語コミュニケーション学科]
- オンライン講義中のアンケート・チャットで学生の意見を吸い上げることで、関心が高まったように思われる。[会計ガバナンス学科]
- Zoom ではブレイクアウトセッションにより、毎回討議するメンバーが異なる。そのため、課題に対する多様な視点を共有できるとともに、初めて知り合う者同士の協働作業に必要なスキルを養うことができる。[社会福祉学科]

<課題>

- オンライン授業では学生の様子がわかりにくく、また、学生同士の対話的な学びも制限されてしまう。結果として DP2 のような側面を育成することが難しくなる。[教育学科]
- 個別のコミュニケーションがとれないため、興味・関心を醸成できない。[環境システム学科]

③オンライン授業下での DP 到達状況：DP3<思考・判断>に関して

<良かった点>

- 一部授業では各学生の課題に細かくフィードバックし、論理的・理論的な分析力を向上させようという取り組みが行われた。[経営学科]
- 資源の活用を制限された中で、新しいアイデアやその状況に合わせた活動を検討することにつながった。[社会福祉学科]
- こまめな成果物提出によって思考する機会を設けられる。[教養教育部会]

<課題>

- 自由記述欄では「レポートの負担が重く、一つ一つの分析や議論の質がどうしても低くなってしまった」との声も存在していた。学友と気軽に意見交換したり、教え合いながら課題に取り組むというような環境がなく、苦勞した学生も多かったようである。[経営学科]
- 思考・判断の到達度の面からは、オンライン授業で質問がなかなか出ない場合の把握は難しく、特に自分からアクションできない学生への対応が難しい。[数理工学科]

④オンライン授業下での DP 到達状況：DP4<実践的スキル・表現>に関して

<良かった点>

- チャットやメールを利用した発言や質問が目に見えて増えており、**意見交換が活発**になった。[日本文学文化学科]
- 画面共有で直接学生が発表する機会も増えた**ことで、相応のスキルも身につけてきていると感じられる。[日本語コミュニケーション学科]
- チャットを使用したコミュニケーションが活発**に行われる様子が授業内で見られた。「オンラインの方が発言しやすい」などの意見も散見された。また、Google Drive 等の機能を使い、オンライン上でグループワークを実施する取り組みも行われた。[経営学科]
- Microsoft Teams、チャット、LINE、メールなどを対面時より駆使することが増え、**文章で表現する機会が増えた**。[社会福祉学科]

<課題>

- 1年生については、**登校機会がなく基本的な人間関係・コミュニティができていない**中で、オンライン上でのディスカッションやグループワークを行うことに困難を感じた学生も一部いたようである。[経営学科]
- DP4の実践的スキルについては、スキルの手順を理解したとしても、実際に実施する際には、対象者の反応から臨床的に判断することが求められる。オンラインではスキルの修得には至らなかった。[看護学科]

⑤オンライン授業下での DP 到達状況：その他

<学科独自の取り組みについて>

- Zoom授業展開に関する**学科内勉強会**を実施し、オンライン授業に関する情報交換の場を設定、教員側のスキル向上をはかった(学科FD)。教員同士の情報連携を心掛け、PC環境が整っていないなど**連絡がとれない学生への対応を迅速に行い、授業参加を促した**。[経済学科]
- 4月に専任・非常勤による**オンライン学修における使用ツールや実施方法についてのFD研修**を行った。また教員が参加しているGoogle Classroomにおいて適宜オンライン授業に関する情報を共有した。前期授業が終了した7月時点でも、専任・非常勤によるオンライン授業の振り返りと、講義系・実技系・演習系科目など授業形態の異なるもののオンラインでの実施についての報告会を行った。[幼児教育学科]

<対人コミュニケーションについて>

- 学生同士の関係性ができていない場合は、グループワークやディスカッションが盛り上がりがない**。[環境システム学科]
- ビデオオフなどで全体の学生の様子が伝わりづらく、**講義のペースを掴むことが困難**であった。[建築デザイン学科]

<オンラインツールについて>

- 授業デザインを見直すことができたのが良かった。また、共同作業や情報共有、グループ分けなどは、**オンラインツールを使って効率化**した。オンライン共有ツール：Google スライド、Google Jamboard (ホワイトボード)、Miro (オンラインホワイトボード)等は、オンライングループワークに有効だった。[環境システム学科]
- Google Classroomなどの授業管理ツールにより、**課題提出管理などがスムーズに行え、締切が厳守された**。[建築デザイン学科]

<メリット>

- 法律学科の専任・特任教員は、今年度4月当初から、Zoomを活用し授業を実施した。もっぱら双方向授業であるが、講義の質は落ちなかった(対面と変わらなかったとの受講者からのコメント多数)。むしろ**一定数の学生にとっては、時間の節約もでき、また教室より集中できる**(常に一番前の座席で講義を受講しているのと変わらない)ものとなった。[法律学科]
- 対面授業と比較して、**投影資料が見やすい、学生の投影資料も細かくチェックをすることができる**、授業中に学生のプログラミングを細かく指導することができるなどオンライン授業のメリットを多くあぶり出すことができた。[データサイエンス学科]
- 対面授業に比べて、**出席率が上がった**。[環境システム学科][建築デザイン学科]
- 大学に来ることが困難であった学生に関しては、今年度は**オンラインということでもむしろ単位の取得状況は良い**。結果として休みが多くなっても、何とか最後までコンタクトはとり続けることができています。[数理工学科]

<デメリット>

- オンライン授業をやって良かったという点は見当たらない。データ上では授業理解度が以前より高まったという指摘もあるが、コロナ禍でアルバイトの時間が減り在宅で勉強に充てられる時間が増えたことも影響していると思われ、**一概にオンライン授業による成果とは言い難い**。[グローバルビジネス学科]
- オンライン授業では、実地の学習や双方向のやり取りが難しいため、DP2、DP3、DP4を達成するためにはデメリットがあると言わざるを得ない。しかしながら、教員がオンライン授業の手法に習熟していけば、これらの困難もある程度克服できる可能性はある。[人間科学科]
- 実習/ゼミ授業(設計系の製図、卒業研究など)はオンラインによる授業運営が相当困難である。[建築デザイン学科]

令和2年度 授業改善小委員会の活動

授業改善小委員会メンバー

村松 陸雄	教務部長	和賀 信之	教育企画部長
伊藤 泰彦	学生部長	金子 亮太	学務課係長
三浦 裕子	特任教授 (日本文学文化学科)	古澤 優慈	学務課員
楊 昆鵬	准教授 (日本文学文化学科)	鳥井 幸望	武蔵野学務室主幹
深谷 健	准教授 (政治学科)	並木 康子	学部事務課員
松岡 佑和	准教授 (経済学科)	杉村 大輔	教育企画課員
積田 淳史	准教授 (経営学科)	牧嶋 美紗子	教育企画課員
泉 明宏	准教授 (人間科学科)		

■目的 問題意識に基づく挑戦的な授業を設計・実践・評価し、体系的に知見を蓄積する。

- 活動 第1回：令和2年8月24日（月） 第2回：令和3年2月18日（木）
- 令和2年度授業改善トライアル後期募集の査定について
 - 令和3年度授業改善トライアル募集の査定について
 - オンライン授業の運営状況について

■授業改善トライアルとは

【トライアルの概要】

- 授業改善に向けた取り組みであれば、その内容・手法は問わない
- 意欲的な新たな試みに対し、取り組みの成否は問わないが、効果や変化に対する報告を求める
- 本トライアルの実施計画に基づいて授業計画を立て、シラバスを作成する
- 学内FDやFDレポート等を通じ、本取り組みについて学内外へ案内する
- 1申請に対する支援額の上限：受講生数に応じて最大20万円とする

【トライアルに求める成果指標】 下記(1)～(3)の全てあるいはいずれか

- (1) 授業内容の理解度を深める
- (2) 学問的、知的興味・関心の広がりにつながる
- (3) 授業以外の学修時間の伸びにつながる

【令和2年度 授業改善トライアル選定事業一覧】

No.	教員名(敬称略)	トライアル名	対象科目名	対象学科・学年・開講学期
1	藤浦 五月 (コーディネーター) 各クラス担当者：宇野・桑野 小熊・佐々木	共通リーディングノートを用いた リーディング習慣育成とリーディン グスキルの把握	日本語 1D	グローバルコミュニケーション学科 日本語コミュニケーション学科 1年次 4学期
2	渡邊 紀文 圓崎 祐貴 岡田 龍太郎	オンラインワークスペースを利用し たプログラミング演習環境の構築	プログラミングリテラシー	武蔵野 BASIS 1年次 3・4学期

【令和3年度 授業改善トライアル選定事業一覧】

No.	教員名(敬称略)	トライアル名	対象科目名	対象学科・学年・開講学期
1	高橋 桂子	「Grammar Video for Genki」 導入による初級日本語科目への 反転授業	日本語 1ABCD 基礎日本語 1ABCD	グローバルビジネス学科 1年次 1～4学期
2	宍戸 拓人	ゼミ教育へキャリア教育を融合さ せる	ゼミナール1 ゼミナール2	経営学科 3年次 1～4学期

令和2年度 授業改善トライアルより ～授業改善事例の紹介～

<事例1>

トライアル名：共通リーディングノートを用いたリーディング習慣育成とリーディングスキルの把握

科目名・対象：「日本語1D」グローバルコミュニケーション学科・日本語コミュニケーション学科 1年次 4学期

担当教員名：藤浦 五月 講師

(各クラス担当者：宇野 聖子 非常勤講師・桑野 幸子 非常勤講師・小熊 貞子 非常勤講師・佐々木 馨 非常勤講師)

●トライアルのねらいと内容

知的にアクティブな授業を展開するためには、専門や授業形態に関わらず、質の良い十分なインプットが必要である。しかしながら「図書館を利用してほしい」「本や論文を読んでほしい」と声がけをするだけでは、学生自身は「どう読めば良いか」も分からず、ましてや習慣づけるのは難しい。本トライアルでは、①リーディングノートを開発し、②本手法が様々なタイプの学生に機能するか検証するという2つの目的を設定し、一部はこれまでの実践で使用したことのある資料を読ませ、リーディングノート使用以前の学生の学習取り組み状況や読み方との比較を行った。具体的な検証方法および期待される効果については以下の通り。

【検証方法】

1. これまでの課題提出状況比較
2. 読解課題の内容比較
3. 学生へのインタビュー
4. 教員へのインタビュー

【期待される効果】

1. リーディング習慣の定着、リーディング手法への意識づけ
2. 多様なクラスのリーディング特徴の把握と多様なアプローチの模索・確立
3. 教員同士の連携手法の確立

●成果検証結果

到達目標	検証結果
本授業に参加する全ての学生がリーディングノートを利用して授業に臨み、リーディングガイドに沿って資料を読めるようになる	<ul style="list-style-type: none"> ●全ての教員から「議論のきっかけ」「主張」「根拠」の3点セットを意識し探しながら読むようになったという声が寄せられた。 ●学生からは、できるようになったこととして、書かれていることを鵜呑みにせず疑問点を見つけようとするものが挙げられた。振り返りアンケートでは、特に「3点セットを探す」「批判的に読む」は学生自身もできるようになったこととして挙げている人が多かった。 ●読書ノートで何回も同じ読解活動（3点セット探し・要約・図解）をルーティン化することで「ある程度読めるようになる」と感じた学生や、自分の要約の振り返りをする事で自分の読解のくせやできていなかったことに気づいた学生がいた。
全学生が上記を到達できない場合は、読みの特性を把握し、リーディング習慣・スキル育成への手段を開発する	<ul style="list-style-type: none"> ●多くの学生が意識して読めるようにはなったが、授業初回の能力チェックでは、「要約自体がわからない」「自分の解釈に寄せてしまう」「文章全体の関係性の理解、意見と立場の理解ができない」等のリーディング課題（さまざまな特性）が明らかになった。 ●これらのさまざまな課題・特性が明らかになったことで、次年度以降の教材のあり方を検討することができた（改善のためのタスクを複数挙げられた）。

●授業改善の効果

リーディング習慣の定着、リーディング手法への意識づけ

9割以上の学生がリーディングノート（毎週の課題）を提出した。また、担当教員全員から、リーディングガイドをもとに「議論のきっかけ」「主張」「根拠」の3点セットを意識し探すようになったという声が得られた。

多様なクラスのリーディング特徴の把握と多様なアプローチの模索・確立

初回の能力チェックでは「読む」ということ自体が理解できていない学生が多くみられ、またその程度や傾向も多様であった。そのような学生に対する改善タスクが担当教員より新たに複数挙げられた。

教員同士の連携手法の確立

「授業後すぐにZoom ミーティングを行ってよかった」「記憶が新しいうちに授業の振り返りができ、それを踏まえて次回の教材や活動内容などを検討することができた」という声が寄せられた。

●次年度以降の同科目へ、また他の科目や教員への展開可能性

要約がうまくできない学生や、要約は重要項目を抜き出してつなぎ合わせたら良いと考えている学生には、クラスメートの要約例を共有して要約の過程等を議論させたことで、複数の改善タスク案が挙げられたため、次年度さらにテキスト開発を進めたい。また、他の科目への展開としては、資料を読み込んでリアクションペーパーやレポートを作成するようなクラスは、読んでいることを前提とせず、読解ノートを活用して理解度を確認することや、教員が資料の読解目的を明示することで、より理解が深まった状態でアウトプットできるのではないかと考える。

<事例 2>

トライアル名：オンラインワークスペースを利用したプログラミング演習環境の構築

科目名・対象：「プログラミングリテラシー」武蔵野 BASIS 1 年次 3・4 学期

担当教員名：渡邊 紀文 准教授 圓崎 祐貴 助教 岡田 龍太郎 助教

●トライアルのねらいと内容

令和2年度前期のオンライン授業に対する授業評価から、多くの学生は教員から個別にコメントを受けることを望んでいるが、Zoom 等の一斉配信では自ら質問をすることが難しいという報告があった。また、他の学生の様子が分からないため、自分の状況を確認することが困難であり、授業についていけないといった報告もあった。そこで本トライアルでは、オンラインワークスペースの一つである「Remo Conference」を使用し、オンライン上で学生の個別サポートが可能であり、学生同士の自由なディスカッションを取り入れたプログラミング授業の演習環境を構築した。具体的な検証方法および期待される効果については以下の通り。

【検証方法】

1. 課題提出率
2. 授業内での質問の回数

【期待される効果】

1. 授業理解度の向上
2. 課題提出率の向上
3. 課題に取り組む意欲を促進
4. 学生の主体的な問題解決能力の育成

●成果検証結果

到達目標	検証結果
授業時間内外のオンライン上での個別サポートにより、課題の提出率を向上させる	<ul style="list-style-type: none"> ●結果として課題提出数が不足していた学生は全体の 1 割以下となった。 ●毎週2～3の課題を実施していたが、6割以上の学生は全ての課題を基準となるレベルで達成することができた。学生が相互に相談して課題を実施し、また授業中つまづいている学生に対して教員が個々にサポートすることができたからと考えられる。 ●演習室は各講義、週に1回 90 分開室し、ほぼ毎回2～3名程度の学生が参加していた。演習室の参加人数としてはそれほど多くはないが、個々が抱えていた問題は対応に時間がかかり、1人あたり 30 分以上かかる学生もいた。演習室内では課題を学生が 1人で解決できるところまでをサポートし、それらが課題の提出の向上につながったと考えられる。
学生相互の情報共有により、授業内での質問の回数を削減する	<ul style="list-style-type: none"> ●授業中は学生が相互に音声で対話し、教員がサポートする前に問題を解決している様子が見られた。 ●教員からアナウンスをする場合は、Remo に搭載されているアナウンスツールおよび授業支援ツールとして利用した Microsoft Teams によって情報を共有したことで、同じ質問に繰り返し対応することなく、即時に対応することができた。

●授業改善の効果

授業理解度の向上、課題提出率の向上

学生は自分の PC 画面を表示し、そのグループに教員が参加することで学生の演習の様子を確認した。これにより、学生側から質問をせずとも教員がつまづいている学生を確認して声をかけることが可能となり、オンライン上で質問をすることが苦手な学生のサポートをすることが可能となった。また、オンライン上での演習室を設置したことにより、授業時間外にも学生が学習できる場を提供することが可能となった。これにより、授業時間外の課題実施時に孤立し、課題を提出できないといった問題を解決したり、授業時間外にも他の学生とコミュニケーションをとりながら課題を実施することが可能となった。

課題に取り組む意欲を促進、学生の主体的な問題解決能力の育成

グループ内で学生が画面を共有することで、他の学生の状況を知り、自分の進捗状況を客観的に把握することで課題に取り組む意欲を促進することができた。また課題でつまづいたときに、グループ内で相互に情報を共有し、学生の主体的な問題解決能力を育むことができた。

●次年度以降の同科目へ、また他の科目や教員への展開可能性

令和3年度開講の情報科目「プログラミング基礎」「プログラミング発展」においても Remo Conference を利用して授業を実施する。また、令和2年度に実施された情報科目の「プレゼンテーション」「メディア・人工知能リテラシー」の一部の授業、データサイエンス学科のゼミなどにおいて、Remo Conference は活用されている。令和3年度はさらに情報科目の演習を中心とした他の科目でも利用を予定しており、将来的には情報科目全体でこのようなオンラインワークスペースを利用する予定である。



Remo Conference でのプログラミング授業の様子

令和2年度 学科FD実施報告

文学部 日本文学文化学科	
日時	令和2年7月26日(日) 14:00～17:00
講師	北海道大学大学院文学研究科 教授 中村 三春 氏
テーマ	新・原作の記号学 -伊藤俊也監督『風の又三郎 ガラスのマント』に触れて-
目的	映画と文芸との関係を第二次テキストの理論として研究を進める中村三春氏を講師に迎え、『風の又三郎 ガラスのマント』(監督:伊藤俊也、1989年)を題材として理論的な整理をおこない、先著「(原作)の記号学」以後の新たな研究の展望を聞く。
日時	令和2年9月15日(火) 15:00～16:30 令和2年9月17日(木) 10:00～12:00
講師	日本文学文化学科 楊 昆鶴 准教授
テーマ	オンラインツールを活用した授業実施の実践例と課題の検討
目的	専任、非常勤を問わず文学部の授業を担当する教員が集って、Zoom や Google Classroom などのオンラインツールの授業での活用方法について、実践例の報告に基づき、現時点での成果の共有と、課題の検討を行う(2回に分けて開催し、各自の都合が合う日時に参加する形を採った)。
日時	令和2年12月26日(土) 14:30～16:30
講師	日本文学文化学科 渡辺 幸之助 特任教授
テーマ	“汝自身を知れ”って何のため? -正しく自己認識をするために、教育や文化が果たせること-
目的	コロナ禍にあって対面での授業実施が難しく、オンライン授業が普及するなど、教育の環境が大きく変わる中で、教育とは何か、教育に何が求められ、何ができるのかを改めて問われている。中学校国語科教諭、校長として長く活躍した渡辺氏の知見と経験に基づき、教育の現場における自己認識という観点で、文学・文化教育に今求められることについて検討整理した講演を聞く。
グローバル学部 グローバルコミュニケーション学科	
日時	令和2年11月24日(火)
講師	グローバルコミュニケーション学科 古家 聡 学科長・教授(司会)
テーマ	授業評価に関する学科FD
目的	学生からの授業評価について、今後の学科の運営と方針を検討する。
日時	令和3年2月3日(水)
講師	グローバル学部 榎 殿武 学部長・教授・中国語コーディネーター
テーマ	授業におけるZoomの活用法
目的	グローバル学部で中国語科目を担当する孔子学院の講師を対象にZoomによる授業の質的向上を図る。
日時	令和3年2月16日(火) 13:00～14:30
講師	—
テーマ	学生満足度・教員満足度の向上策について(グローバルコミュニケーション学科・日本語コミュニケーション学科・グローバルビジネス学科合同開催)
目的	学生満足度と教員満足度を向上させるためのアイデア・意見を自由に出し合い、その有効性・実効性を議論する。

日時	令和3年3月2日(火) 14:00～15:30
講師	グローバル学部 榎 殿武 学部長・教授・中国語コーディネーター 教養教育部会 遠藤 祐介 教授・中国語コーディネーター
テーマ	グローバル学部・教養教育部中国語科目担当講師FD
目的	令和3年度の対面とオンラインの同時双方向授業の併用における諸問題を説明し、情報の共有を図る。
日時	令和3年3月17日(水) 10:30～12:30
講師	グローバルコミュニケーション学科 古家 聡 学科長・教授 グローバルコミュニケーション学科 石黒 武人 准教授 グローバルコミュニケーション学科 小塚 高志 講師 教育学科 櫻井 千佳子 教授
テーマ	グローバルコミュニケーション学科EQ・ISQ科目学科FD
目的	カリキュラムおよび授業運営に関する説明ならびに教員同士の情報共有および交流を図る。
日時	令和3年3月23日(火) 10:00～12:00
講師	グローバルコミュニケーション学科 Anne C. Ihata 教授 グローバルコミュニケーション学科 Albert R.Zhou 教授
テーマ	グローバルコミュニケーション学科・日本語コミュニケーション学科のPC/ISC科目学科FD
目的	カリキュラム及び授業運営に関する諸問題の説明と議論、特にスピーキングやライティングの強化に関する議論の推進。また、すでに各コースにて一定の比重を占めるSDGsの受講生への普及について情報の共有を図る。
グローバル学部 日本語コミュニケーション学科	
日時	第1回 令和2年4月9日(木) 16:00～17:00 第2回 令和2年4月16日(木) 16:00～17:00 第3回 令和2年4月23日(木) 16:00～17:00 第4回 令和2年4月30日(木) 16:00～17:00
講師	—
テーマ	日本語コミュニケーション学科授業科目担当教員オンライン相談会
目的	オンライン授業開始のための学科としてのフォロー窓口として、日本語コミュニケーション学科、大学院ビジネス日本語コース科目ご担当の非常勤の先生方、専任の先生方と情報交換等を行う。
日時	令和2年8月31日(月) 14:00～15:30
講師	大阪大学 全学教育推進機構 教育学習支援部 教授 村上 正行 氏 司会:日本語コミュニケーション学科 藤本 かおる 准教授
テーマ	オンライン授業の可能性を探る -授業マネジメントから評価まで-
目的	9月からもオンライン授業が続く予定であるため、より良いオンライン授業を目指し、専門家によるオンライン授業についてレクチャーを受け、学部としてオンライン授業の質の向上を目指す。また、学部内での取り組みなどの情報も共有する。
日時	第1回 令和2年9月11日(金) 15:00～16:00 第2回 令和2年9月16日(水) 15:00～16:00 第3回 令和2年9月25日(金) 17:00～18:00 第4回 令和2年9月30日(水) 17:00～18:00
講師	—
テーマ	日本語コミュニケーション学科・ビジネス日本語コース教員オンラインよろず情報交換会&茶話会

目的	後期オンライン授業継続のための学科としてのフォロー窓口として、日本語コミュニケーション学科、大学院ビジネス日本語コース科目ご担当の非常勤の先生方、専任の先生方と情報交換等を行う。また、学生・院生の情報交換と対応を検討する。
日時	令和2年11月24日(火) 18:00～19:00
講師	—
テーマ	令和2年度授業評価アンケートを基にした学科FD
目的	アンケート結果を基に、①令和2年度武蔵野大学数値目標の達成に向けた検証、②DP検証等を行う。
日時	令和3年1月8日(金) 13:00～14:30
講師	—
テーマ	日本語コミュニケーション学科英語EQ担当教員シラバス執筆に関するFD
目的	日本語コミュニケーション学科としての英語教育の充実と、曜日によって対面対応、オンライン対応となる授業構成について検討する。
日時	令和3年1月15日(金) 15:00～16:30 令和3年1月23日(土) 12:00～13:00
講師	—
テーマ	言語文化研究科ビジネス日本語コース担当教員シラバス執筆に関するFD
目的	ビジネス日本語コースの方針確認と各授業間の目標共有、日本語コミュニケーション学科とのアーティキュレーションを踏まえ、シラバスについて検討する。
日時	令和3年1月24日(日) 20:00～21:30
講師	—
テーマ	日本語コミュニケーション学科等日本語担当教員シラバス執筆、授業運営に関するFD
目的	令和2年度の日本語教育系科目の情報共有と令和3年度に向けての改善等を議論、検討する。
日時	令和3年3月24日(水) 13:00～14:30
講師	—
テーマ	令和3年度 日本語コミュニケーション学科、ビジネス日本語コース授業科目担当者合同顔合わせFD
目的	令和3年度の方針確認と全体での情報共有と顔合わせ
グローバル学部 グローバルビジネス学科	
日時	令和2年12月25日(金) 16:20～17:10
講師	—
テーマ	2学期授業評価アンケートの振り返りについて
目的	授業評価アンケートを通じて、オンライン授業の良い点・悪い点を確認し、今後の授業運営に役立てる。
日時	令和2年12月25日(金) 17:10～17:50
講師	—
テーマ	オンライン授業における不正行為防止策について

目的	従来の対面授業からオンライン授業中心の環境となるなか、オンライン授業ならではの不正行為防止策について教員間で知識・ノウハウの共有を図る。
法学部 法律学科	
日時	令和2年12月17日(木) 19:15～20:00
講師	—
テーマ	授業評価アンケート結果を基にした学科FD
目的	対面授業、オンライン授業の複合的観点から、科目のアセスメントおよび学科カリキュラムのアセスメントについて検証する。
日時	令和3年1月21日(木) 18:30～19:15
講師	法律学科 佐藤 直人 教授 法律学科 荒木 泰貴 講師
テーマ	オンライン・対面授業の複合型授業実施に向けた具体的展開方法
目的	ゼミナールにおけるハイフレックス講義の実施方法とその可能性について情報共有を行う。
法学部 政治学科	
日時	令和3年1月21日(木) 17:30～
講師	—
テーマ	コロナ禍におけるオンライン授業について
目的	学科内のオンライン経験について情報を共有し、ベストプラクティスを考察する。
日時	令和3年2月18日(木) 17:30～
講師	—
テーマ	コロナ禍におけるオンライン授業について
目的	オンライン授業の実施について経験と事実を報告し、今後の政治学の教育をめぐって長所短所を考える。
経済学部 経済学科	
日時	令和2年8月5日(水) 10:30～11:50
講師	—
テーマ	オンライン授業について -1・2学期の振り返りと3・4学期に向けて-
目的	初めての導入となったオンライン授業実施方法について教員間で情報共有を行う。
日時	令和2年10月16日(金) 17:45～18:30
講師	—
テーマ	3学期のオンライン授業の状況について
目的	3学期のオンライン授業実施状況について意見交換、オンライン授業事例の紹介。
日時	令和2年12月17日(木) 18:15～18:30
講師	—
テーマ	前期授業評価アンケート結果の確認・総括①
目的	前期授業評価アンケートの結果を受け、学科全教員で授業の質改善等について議論を行う。
日時	令和3年1月22日(金) 18:15～18:45
講師	—
テーマ	前期授業評価アンケート結果の確認・総括②
目的	前期授業評価アンケートの結果を受け、学科全教員で授業の質改善等について議論を行い、報告書を作成する。
日時	令和3年2月8日(月) 10:00～11:15
講師	—
テーマ	後期授業の振り返りと次年度に向けて
目的	後期の授業実施状況について情報共有を行い、次年度の授業実施方法等を検討する。

経営学部 経営学科	
日時	令和2年8月31日(月) 17:00～18:00
講師	経営学科 高橋 大樹 准教授 経営学科 積田 淳史 准教授
テーマ	オンライン授業の反省と改善
目的	後期授業に向けた、前期オンライン授業における改善点の検証。
日時	令和2年9月11日(金) 13:30～14:00
講師	経営学科 高瀬 央 教授 経営学科 渡部 訓 学科長・教授 経営学科 穴戸 拓人 准教授
テーマ	数字・数学への苦手意識の問題と改善策
目的	数字・数学への苦手意識の問題と改善策について検討する。
日時	令和2年9月11日(金) 14:00～14:30
講師	経営学科 渡部 訓 学科長・教授 経営学科 高橋 克徳 特任教授 経営学科 姜 雪潔 准教授 経営学科 穴戸 拓人 准教授
テーマ	学科独自の国際化戦略
目的	学科独自の国際化戦略について検討する。
日時	令和2年9月19日(土) 14:45～15:30
講師	経営学科 積田 淳史 准教授 経営学科 新津 泰昭 講師
テーマ	オムニバス授業の反省と改善
目的	後期授業に向けた、オムニバス授業における改善点の検証。
日時	令和2年10月4日(日) 13:30～14:10
講師	経営学科 高橋 大樹 准教授 経営学科 積田 淳史 准教授 経営学科 新津 泰昭 講師
テーマ	学修機会の確保
目的	学修機会や学修時間を確保するために有益な工夫を考える。
日時	令和2年10月7日(水) 10:00～11:00
講師	経営学科 高橋 克徳 特任教授 経営学科 穴戸 拓人 准教授 経営学科 新津 泰昭 講師
テーマ	オンライン授業における学生とのコミュニケーションについて
目的	オンライン授業(オンデマンド型、リアルタイム型)における学生とのコミュニケーションは、対面授業にはないメリット・デメリットがあるが、工夫次第では、対面授業以上のコミュニケーションを実現できると考え、オンライン授業におけるコミュニケーションの促進の工夫についてシェアする。
日時	令和2年10月9日(金) 13:30～14:10
講師	経営学科 高瀬 央 教授 経営学科 石川 実令 准教授 経営学科 姜 雪潔 准教授 経営学科 渡部 博志 准教授
テーマ	学科教員が担うキャリア教育について
目的	就職・キャリア支援課が行う進路ないしキャリア支援とは別に、学科教員として学生に行いうるキャリア教育や指導について考える。

日時	令和2年11月10日(火) 13:30～14:40
講師	経営学科 小暮 真人 特任教授 経営学科 姜 雪潔 准教授 経営学科 高橋 大樹 准教授 経営学科 渡部 博志 准教授
テーマ	外部講師の活用
目的	ビジネスの最前線との関わりを理解するために招聘している外部講師について、各科目での活用方法を共有し、より有効な活用方法を検討する。
日時	令和2年12月2日(水) 11:00～12:00
講師	経営学部 古川 一郎 学部長・教授 経営学科 石川 実令 准教授
テーマ	マーケティング・流通の授業への外部スピーカーの招聘について
目的	学びと実社会との連続性についての学生の理解を深めるための方策を考える。
日時	令和3年1月14日(木) 15:00～16:00
講師	経営学科 高橋 克徳 特任教授 経営学科 穴戸 拓人 准教授 経営学科 渡部 博志 准教授
テーマ	学科専門科目(組織論)に関するFD:受講生は経営組織をどのようなものとして理解できるのか
目的	実感を持って理解することに難しさのある組織論における工夫について共有し、教育手法について検討する。
日時	令和3年2月8日(月) 9:00～9:45
講師	経営学科 山内 弘隆 特任教授 経営学科 小暮 真人 特任教授 経営学科 姜 雪潔 准教授
テーマ	学科専門科目(エリアマネジメント)に関するFD:自治体や外部機関との連携について
目的	科目の内容構成や展開方式をより充実させ、学生の勉学意欲を高める。
日時	令和3年2月10日(水) 20:00～21:00
講師	経営学科 高橋 大樹 准教授 経営学科 積田 淳史 准教授 経営学科 新津 泰昭 講師
テーマ	学科専門科目(経営戦略分野)に関するFD:経営戦略関連講義における事例の取り扱いについて
目的	経営戦略に関する理論的な議論は抽象度が高いものになりやすく、学生の理解を深める上では適切な事例もあわせて説明することが必要不可欠である。そのため、より良い事例の示し方等を考える上での情報共有を行う。
経営学部 会計ガバナンス学科	
日時	令和2年4～7月(随時)
講師	—
テーマ	オンライン講義の運用方法について
目的	オンライン講義についてのノウハウの交換
日時	令和2年6月16日(火)
講師	—
テーマ	新入生のインクルージョンについて
目的	新入生の学修意欲、本学への帰属意識を高めるための方策の検討

日時	令和3年2月16日(火)
講師	—
テーマ	授業評価アンケートを基にした1年間の教育の振り返り
目的	オンライン講義の成果の振り返り
データサイエンス学部 データサイエンス学科	
日時	令和2年12月8日(火) 17:10～19:10
講師	学生5名(学生FDのため)
テーマ	データサイエンス学部におけるグループ学習について
目的	データサイエンス学部ではグループワークによる協調学習を主として授業を進めている。それについて、学生の視点から改善点などをディスカッションする。
日時	令和3年1月18日(月) 10:00～11:00
講師	データサイエンス学科 中西 崇文 学科長・准教授
テーマ	授業評価アンケートからみるオンライン授業、グループワークについて
目的	授業評価アンケートの結果をレビューしながら、オンライン授業の長所短所、改善すべき点について議論すると同時に、データサイエンス学部で積極的に取り組んでいるグループワークによる協調学習を主として授業をオンラインで行う際での問題点について洗い出しを行う。
人間科学部 人間科学科	
日時	令和2年11月27日(金) 16:30～17:00
講師	人間科学科 五島 直樹 教授
テーマ	演習および対面授業における感染症対策
目的	新型コロナウイルス感染症の拡大の中、実習および授業における対面化対策の情報共有を行う。
日時	令和2年12月25日(金) 16:30～17:00
講師	人間科学科 岩本 操 教授 人間科学科 坂入 竜助 助教
テーマ	精神保健福祉士養成課程 実習代替プログラムの実施報告
目的	新型コロナウイルス感染症の影響により、配属実習が中止となり、オンラインによる実習代替プログラムを実施したため、その取り組みと課題を共有する。
日時	令和3年1月29日(金) 16:30～17:00
講師	株式会社マイナビ 就職情報事業本部 企画広報統括本部 部長 吉田 優太氏
テーマ	「人間科学科就職対策講座」の振り返り
目的	令和2年度に実施した「人間科学科就職対策講座」を踏まえて、学科学生の特徴(不足点)や今後の改善方法(強化点)および低学年からのキャリア形成に関する提案を行う。
人間科学部 社会福祉学科	
各学期の社会福祉特論の授業時間	
日時	令和2年 5月15日(金) 14:40～16:10 令和2年 7月 3日(金) 14:40～16:10 令和2年11月13日(金) 14:40～16:10 令和3年 1月22日(金) 14:40～16:10
講師	各学期の授業担当教員(各学期2名の教員が担当)
テーマ	学科教員の専門分野の理解と教授法の共有
目的	各教員の専門分野について理解を深め、教授法についての共有を図る。

日時	令和2年9月25日(金) 18:00～19:00
講師	「専門ゼミ2」担当教員
テーマ	各ゼミの特徴を活かした国試対策の進め方
目的	各ゼミでのグループ学習の取り組みやゼミごとの国試対策に関するノウハウの情報交換を通して、各ゼミの国試対策に活かす。
日時	令和2年12月25日(金) 18:00～19:00
講師	—
テーマ	授業評価アンケートの結果を基にした学科FD
目的	授業評価アンケート結果(履修者の自宅学習時間等のデータ)をもとに検討し、学生がよりよい学びを得るために必要な方策を検討した。また、学科のDPおよびCPとの関係から、達成状況とよりよく達成するための方策を検討する。
日時	令和3年1月29日(金) 16:30～17:30
講師	株式会社マイナビ担当者
テーマ	人間科学科FD(就活支援)研修への参加
目的	人間科学科のFD研修への参加を通して、研修内容を社会福祉学科学生の就活支援に活かす。
工学部 環境システム学科	
日時	令和2年11月30日(月) 16:30～18:00
講師	—
テーマ	授業評価アンケートに基づく学科FD
目的	授業改善のための知見の共有、意見交換
日時	令和3年2月18日(木) 13:00～14:30
講師	—
テーマ	プロジェクトベースドラーニングの手法や授業運営について
目的	「環境プロジェクト1・2」の質の向上
工学部 数理工学科	
日時	令和2年4月 9日(木) 18:00～19:00 令和2年4月16日(木) 18:00～19:00 令和2年4月23日(木) 18:00～19:00 令和2年4月30日(木) 18:00～19:00
講師	—
テーマ	オンライン授業でのツールの使い方
目的	どのようなツールを授業に使えるのかを知る。
日時	令和2年12月24日(木) 18:00～19:00
講師	—
テーマ	授業評価アンケートを基にした授業改善
目的	対面授業のみだけではなくオンライン授業の要素も加えた観点で、授業改善のための議論を行う。
日時	令和3年2月18日(木) 14:00～15:00 令和3年3月 1日(月) 16:30～18:00
講師	—
テーマ	数理工学科の授業構成に関する検討
目的	大学院修士課程完成に伴い、数理工学科の授業構成を再度見直し、今後の進むべき方向を考える。
工学部 建築デザイン学科	
日時	令和2年10月6日(火) 13:00～13:30
講師	—
テーマ	オンライン授業対応等で利用されているツールの種類やその使用感について
目的	各教員がそれぞれの授業などで活用しているオンライン授業ツールの情報共有

日時	令和2年10月13日(火) 18:00～19:00
講師	—
テーマ	来年度以降の学科の取り組みについて
目的	令和3年度以降に向けた学科の中長期改善計画の立案
日時	令和3年1月19日(火) 13:00～13:30
講師	—
テーマ	令和2年度前期授業評価アンケート結果
目的	建築デザイン学科におけるPDCAサイクルの確立に向けた授業改善
教育学部 教育学科	
日時	令和2年7月9日(木) 17:00～18:00
講師	—
テーマ	オンライン授業の成果と課題
目的	コロナ禍の影響により、前期授業はオンラインとなった。前期末にあたり、オンライン授業の成果と課題を振り返ることで、当面もオンライン授業となるであろう後期授業の授業改善や、対面授業が再開された時にオンライン授業のノウハウをどのように活かすかについて検討する。
日時	令和2年12月20日(日) 17:00～18:00
講師	教育学科 櫻井 千佳子 教授 教育学科 佐藤 克士 准教授 教育学科 小野 健太郎 講師 教育学科 渡辺 英雄 講師
テーマ	オンライン授業の実際
目的	コロナ禍の影響により、前期授業はオンラインとなった。後期授業では11月から対面授業の一部再開がなされているが、オンライン授業も継続されている。前期授業評価で評価が高かった授業について、担当教員から授業内容や工夫された点を教授いただき、授業改善のための参考とする。
日時	令和3年3月28日(日)～29日(月)
講師	—
テーマ	教育学科独自科目「教育ブレ実習」の内容検討および学科としてのSDGs教育に関する検討
目的	他大学との比較においても独自性の高い2年生の選択科目「教育ブレ実習」について、来年度は更なる拡充を図る予定である。新しく実習場所として開拓した愛媛県上島町でFD研修を行うことで、本地での学修内容の検討や他の実習場所も含めた「ブレ実習」の在り方と学科としてのSDGs教育について検討する。
教育学部 幼児教育学科	
日時	令和2年4月18日(土) 13:00～15:00
講師	幼児教育学科 生井 亮司 学科長・教授 幼児教育学科 箕輪 潤子 准教授
テーマ	オンライン授業の実施方法について
目的	オンライン授業を実施するにあたってのアプリケーションの使用法、授業運営の方法などについて学科専任教員および非常勤教員で共有を図る。
日時	令和2年7月18日(土) 13:00～15:00
講師	—
テーマ	前期オンライン授業の実施における工夫点と検討事項
目的	前期のオンライン授業実施方法を講義系、実技系、指導法系など、授業形態の異なるタイプから抽出し、それぞれの工夫点、問題点などについて共有し、後期のオンライン授業がブラッシュアップされることを目的とした。

日時	令和3年1月14日(木) 18:00～19:30
講師	幼児教育学科 榎田 二三子 教授 幼児教育学科 生井 亮司 学科長・教授 幼児教育学科 川上 暁子 准教授 幼児教育学科 箕輪 潤子 准教授 幼児教育学科 今福 理博 講師
テーマ	授業評価アンケートからオンライン授業と授業時間外学習の関係を探る
目的	オンライン授業における課題の実施方法についての検討
薬学部 薬学科	
日時	令和3年1月12日(火) 16:30～16:50
講師	薬学科 廣谷 功 学科長・教授
テーマ	前期の授業評価アンケート結果の紹介
目的	前期の授業評価アンケート結果の概要を薬学部教員に紹介し、改良を要する箇所の点検と改良案の検討を行う。
日時	令和3年1月12日(火) 16:55～17:30
講師	薬学科 市瀬 浩志 教授
テーマ	学外授業オンライン化の試み -薬用植物園見学実習-
目的	令和2年度に実際に実施した「オンラインを利用する植物園見学実習」の実施方法と成果を紹介していただき、実習・講義の新たな実施方法について理解する。
日時	令和3年1月12日(火) 17:35～18:15
講師	薬学科 廣谷 功 学科長・教授
テーマ	二教室での中継を行うためのテスト結果の報告
目的	来年度前期から実施予定の対面式講義は講義室収容人数が半分になるために、講義を実施している教室から他の教室への中継が必要である。手持ちのPCやビデオカメラを利用した中継方法のテスト結果を報告し、講義担当教員への実施方法の周知を目的とする。
日時	令和3年1月19日(火) 13:00～15:30
講師	—
テーマ	企画検討会・ヒアリング
目的	各研究室で研究内容に関する発表と、以降の研究の企画提案を行う。
日時	令和3年1月26日(火) 16:30～16:50
講師	薬学科 片川 和明 講師
テーマ	令和2年度 学修支援プログラムの報告
目的	令和2年度に実施した1年生対象の学修支援プログラムの報告
日時	令和3年2月2日(火) 16:30～17:00
講師	薬学科 大畑 慎也 講師
テーマ	学生のオンライン講義に関するアンケートの結果について
目的	オンライン講義を受講している学生の生の声を聞くことで講義の実施方法について考える。
看護学部 看護学科	
日時	令和2年12月22日(火) 13:00～14:40
講師	—
テーマ	令和2年度授業評価アンケートを基にした検討
目的	対面授業、オンライン授業の複合的観点から、科目ごとの学修成果の達成状況を確認し、学科の教育課程全体を通じた学修成果の達成状況を確認することを目的とする。

日時	令和3年2月10日(水) 13:00～14:30
講師	福岡女学院看護大学 シミュレーション教育センター センター長 藤野 ユリ子 氏
テーマ	IT時代の新しい教育方法 -仮想都市ミッションタウンの構築と活用-
目的	生活体験が乏しい現代の学生が、さまざまな健康状態にある対象者とその家族、地域を理解し、家族を中心とした事例に基づく看護過程を展開する力を培う新しい教育方法を学ぶことを目的とする。これらの方法を通して、ITを活用し、自ら発展的に学び考える自己教育力を高め、新たな教育方法を本学で導入するための方法を検討することにつなげる。
教養教育部会	
日時	令和2年4月7日(火) 13:00～15:00 令和2年9月9日(水) 10:00～11:30 令和3年2月22日(月) 10:00～12:00
講師	教養教育部会 平田 秀 講師
テーマ	武蔵野 BASIS 日本語リテラシー FD 研修会
目的	先生方との顔合わせと授業の振り返り・情報交換
日時	令和2年8月25日(火) 16:00～17:00
講師	教養教育部会 福土 輝美 教授
テーマ	司書・司書教諭 FD 研修会
目的	「司書」「司書教諭」科目をご担当いただく先生との授業に関する情報交換
日時	令和2年9月14日(月) 10:00～11:30 令和3年2月24日(水) 14:00～16:00
講師	教養教育部会 平田 秀 講師
テーマ	武蔵野 BASIS 日本語 FD 研修会
目的	授業に関する情報交換
日時	令和2年9月16日(水) 10:30～12:00 令和3年2月25日(木) 10:00～17:00
講師	教養教育部会 菅原 克也 教授
テーマ	武蔵野 BASIS 仏西独語 FD 研修会
目的	・カリキュラム改革のあらまし ・質の高い授業の展開を実現するための工夫
日時	令和2年9月17日(木) 13:00～15:00 令和3年2月26日(金) 10:00～12:00
講師	教養教育部会 菅原 克也 教授
テーマ	武蔵野 BASIS 英語 FD 研修会
目的	・カリキュラム改革のあらまし ・質の高い授業の展開を実現するための工夫
日時	令和2年11月18日(水) 16:20～16:40
講師	教養教育部会 平田 秀 講師
テーマ	三重県尾鷲方言のアクセント研究と日本語歌謡曲のリズムの研究
目的	研究発表
日時	令和2年12月16日(水) 16:20～16:40
講師	教養教育部会 林 浩一 教授
テーマ	Strategic Writing: 学校で教えられる「ロジカルシンキング」体系を目指して
目的	研究発表

日時	令和3年1月20日(水) 16:20～16:40
講師	教養教育部会 東郷 裕 准教授
テーマ	復讐文学の魅力
目的	研究発表
日時	令和3年3月2日(火) 10:00～12:00
講師	教養教育部会 遠藤 祐介 教授
テーマ	武蔵野 BASIS 中国語 FD 研修会
目的	授業改善点の共有および来年度授業について
通信教育部	
日時	第1回 令和2年5月31日(日) 11:00～12:00 第2回 令和2年5月31日(日) 18:00～19:00 第3回 令和2年7月3日(金) 18:00～19:00 第4回 令和2年7月5日(日) 18:00～19:00
講師	通信教育部人間科学部人間科学科 本多 勇 通信教育部長兼学科長・教授 通信教育部人間科学部人間科学科 松野 航大 助教
テーマ	オンライン授業に関する Zoom オンライン FD
目的	オンラインスクーリングに向けた主に非常勤講師向けの学科 FD である。スクーリング代替のオンライン双方向授業に向けた Zoom および WBT の使い方について理解を深める。
日時	令和3年2月22日(月) 16:30～
講師	通信教育部人間科学部人間科学科 本多 勇 通信教育部長兼学科長・教授
テーマ	・通信教育部の歩みと現状 ・令和2年度の通信教育部の取り組みと課題
目的	令和3年度で20周年を迎える通信教育部の歩みと現状について確認する。また、令和2年度の新型コロナウイルス対応について振り返るとともに、そこから見えてきた課題について整理する(通信教育部紀要掲載の報告論文を基にして報告する)。
日時	令和3年3月22日(月) 16:30～
講師	通信教育部人間社会研究科 野口 普子 准教授
テーマ	通信教育課程の大学生の大学生生活満足度とライフスタイルの関連について
目的	通信教育部在籍の学生を対象に行った大学生生活の満足度とライフスタイルの実態に関するweb アンケート調査の途中経過報告を行う。特に若年学生(25歳以下)とそれ以外の学生の特徴について検討していただく(本学「しあわせ研究所」採択研究である)。

令和2年度 研究科 FD 実施報告

文学研究科	
日時	令和2年7月26日(日) 14:00～17:00
講師	北海道大学大学院文学研究科 教授 中村 三春 氏
テーマ	新・原作の記号学-伊藤俊也監督『風の又三郎 ガラスのマント』に触れて- (文学部と合同開催)
目的	文学部と文学研究科における研究力の強化と発信力の推進をはかるため、学会をリードするトップランナーを外部講師としてお招きして、研究発表と議論の場を通してFD活動とする。文学研究という共通の土俵の上で最新の知見を拝聴し、各自の研究と論文指導に活かす。
日時	令和2年12月26日(土) 13:00～16:00
講師	教育学研究科 廣瀬 裕之 教授 日本文学文化学科 山路 敦史 助教
テーマ	国文学会の開催
目的	国文学会の開催を通して、文学研究科における研究力の強化と発信力の推進をはかるため、全教員による研究発表会を公開で行う。日頃の学会活動および院生指導の成果を教員と院生が発表する。質疑を含めて、研究の達成状況と指導方針を共有しあえる、FD活動とする。大学院の研究指導は、高度に専門的であるため、日々研究を行い、それを学会の内外で公開し、その成果を問う活動をしていなければできないため、学内でもその活動の一端を公開で行うこととした。
言語文化研究科	
日時	令和2年10月6日(火) 16:20～17:50
講師	言語文化研究科 岩田 夏穂 教授
テーマ	研究倫理審査について
目的	武蔵野大学大学院言語文化研究科研究倫理委員会規程が平成31年4月1日に施行されてから、言語文化研究科は倫理審査委員会を設立し、申請書類を作成した上、研究所所属の教員と院生からの申請を審査してきた。その中で審査の対象、申請書類の作成及び提出時期など、運用上の課題があったため、FDを通して指導教員に情報共有し、課題解決に向けて情報交換と問題解決を考える機会とする。
日時	令和3年2月16日(火) 12:20～13:00
講師	言語文化研究科 石黒 武人 准教授
テーマ	新カリキュラムの実施内容・状況に関する検討
目的	言語文化コースのカリキュラム改編と実施に伴う課題を検討し、新年度における改善点を見つけ、早期に解決策を話し合う上で、研究科の人材育成の目標を明確にし、情報共有をしながら教員の協働体制の確立を図る。
法学研究科	
日時	令和2年12月10日(木) 16:30～18:20
講師	法学研究科 池田 眞朗 研究科長・教授 法学研究科 朱 大明 教授
テーマ	新設科目「起業ビジネス法務総合」実施報告-法学研究科における、創業計画書作成、プレーストリーミング、アイデアレポート、起業プレゼンテーションという新しい段階的実践教育の開発について-

目的	法学研究科ビジネス法務専攻においては、「オンラインでナンバーワン」を目標に、これまでの全国の大学院法学研究科が、ほぼ全面的に「講義と演習(演習は院生による課題報告)」によって教育を行ってきた状況を改革し、新しい「学際的アクティブ・ラーニング」を取り入れて、教育生産性の向上を図る。具体的には、ビジネステーマの課題設定から、その設定課題についてのプレーストリーミング、アイデアレポート、プレゼンテーションという、繰り返しの段階を経て、内容をブラッシュアップして完成させていく過程を実践的に教育する、「段階的実践教育」の確立を目指す。今回のFDはその実践報告として、実施初年度の「起業ビジネス法務総合」の内容を動画を交えて報告し、研究科専任者相互に検討をするものである。
政治経済学研究科	
日時	令和2年9月24日(木) 16:30～18:00
講師	政治経済学研究科 馬場 哲 研究科長・教授
テーマ	政治経済学研究科の問題点と改善策
目的	政治経済学研究科は、経営学研究科、法学研究科が独立したため、現在は政治学・経済学分野のみとなっており、設置時とかなり状況が異なってきている。実務的要素が弱まり、アカデミックになったともいえるが、定員充足率が低下しているという問題がある。また、4学科から構成されていることを前提としたカリキュラムを維持できるかという問題もある。こうした現状を踏まえて、政治経済学研究科の改善策について検討する。
経営学研究科	
日時	令和2年9月16日(水) 16:30～17:30
講師	経営学研究科 科目担当教員10名
テーマ	大学院におけるオンライン授業について
目的	今年度は新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、大学院の授業においてもオンラインにて開講することになったが、学部の授業とどのような点で異なるのか、また、本研究科は社会人学生がメインであることから、ポスト/ウィズ コロナを念頭に置いたオンライン授業の可能性についてどのように考えるか、前期に大学院科目を担当した先生方のお話を伺うとともに、質疑等を通して研究科として今後のオンライン授業の質を高めていくことを目的とした。
人間社会研究科	
日時	令和2年11月20日(金) 17:15～18:00
講師	人間社会研究科 実践福祉学専攻 渡辺 裕一 教授 人間社会研究科 人間学専攻言語聴覚コース 小嶋 知幸 教授 人間社会研究科 人間学専攻臨床心理学コース 浅野 敬子 助教
テーマ	コロナ禍における実習の実践と工夫、今後の見直し
目的	人間社会研究科の各専攻コースにおける実習の現状、課題について情報共有および意見交換を行い、各部門でのよりよい実習のあり方や工夫を考える機会とした。
仏教学研究科	
日時	令和2年12月18日(金) 19:00～21:00
講師	仏教学研究科 丸井 浩 特任教授
テーマ	人文学の役割を考える -日本学術会議会員の活動を踏まえて-

目的	本研究科では、基本方針として「伝統的な文献学の知見を基盤としながら、現代社会の諸課題にいかに対応するかという問題意識を持ちながら」教育研究活動を行うことを謳っている。今回は周囲の目まぐるしい環境変化のなか、古典文献学を基盤とする仏教学のような人文学がどのような役割を果たし得るのかというテーマで研修を行った。また、丸井教授は、長く日本学術会議会員を務め、人文学、特に哲学関係の重要な提言にもかかわらずきたことから、学術会議内での人文学、哲学の位置づけ及び方向性等についても示唆を得ることを目的とする。
環境学研究科	
日時	令和2年12月11日(金) 14:40～16:10
講師	京都大学名誉教授 松下 和夫 氏
テーマ	持続可能な発展と環境人材の育成 -京都大学での経験から-
目的	京都大学大学院地球環境学堂、地球環境学舎で10年余にわたり教授をつとめられ、多くの修士、博士を育ててこられた松下氏をお迎えし、持続可能な発展が求められている中で環境人材の育成の観点から、大学院での環境人材の育成について、お話を伺うとともにディスカッションを行い、武蔵野大学環境学研究科(通学制及び通信制)の今後の運営改善の方途を探ることを目的とした。
工学研究科	
日時	令和3年1月20日(水) 16:20～20:00
講師	一級建築士事務所 SALHAUS 代表 日野 雅司 氏 マル・アーキテクチャー一級建築士事務所代表 高野 洋平 氏
テーマ	大学院での建築デザイン教育
目的	大学院建築デザイン教育のケーススタディーを検証し、今後の大学院教育メソッドを議論する。
日時	令和3年2月18日(木)
講師	-
テーマ	6年一貫教育と大学院進学へのアピールについて
目的	学生が数理工学専攻修士課程へ進学するためのモチベーションをどのように高められるかを考える。
日時	令和3年3月1日(月)
講師	-
テーマ	学科科目と大学院科目の連結について
目的	数理工学専攻修士課程の完成にあたり、数理工学科科目と数理工学専攻科目における履修の流れを確認し、問題点、改善点などを探る。
教育学研究科	
日時	令和3年2月8日(月) 14:00～16:00
講師	東京学芸大学教育学研究科 准教授 林 尚示 氏
テーマ	教育学研究科における研究指導、論文指導の実態と課題
目的	大学院における研究指導、論文指導の方法論ならびに課題を実践事例を元に検討し、今後の大学院における研究指導、論文指導の改善を図る。

薬学研究科	
日時	令和2年9月19日(土)
講師	薬学研究科 伊藤 清美 教授 薬学科 行木 香奈子 講師 薬学科 成田 知也 助教 第一三共株式会社 谷澤 公彦 氏
テーマ	【薬学研究所との合同企画】研究基盤を活かした薬学教育：創造力豊かな人材の育成を目指して
目的	薬学系を統合したブランドビジョン 2020 の取り組みの一つである「SDG3 すべての人に健康と福祉を」の実行目標に向けて、今年度本学薬学部は「令和新時代の薬学アイデンティティを考える」をテーマとして、シンポジウムの企画と各研究室・センター（16 施設）からの研究成果の公表のために、第 64 回日本薬学会関東支部大会を主管校としてオンライン開催した。
日時	令和3年2月16日(火) 13:30～15:25
講師	薬学研究科 修士課程2年生（1名） 博士後期課程1年生（4名） 博士後期課程2年生（3名）
テーマ	【薬学研究所との合同企画】修士課程及び博士後期課程大学院生による修士論文発表会、研究進捗状況の報告
目的	薬学研究科の博士後期課程に在籍する1、2年の院生がこれまでの研究成果を発表し、進捗状況を把握して今後の研究指導や研究の方向性について議論することとした。

日時	令和3年2月18日(木) 13:00～18:00
講師	第一三共株式会社プロジェクトマネジメント部 市川 和雄 氏 薬学研究科 大塚 誠 教授
テーマ	1. プロジェクトマネジメント (PM) の考え方と業務改善 2. 最終講義「医薬品製造管理の進歩－非破壊分析法による医薬本製造工程の進歩」及び薬学部長による統合薬学系 SDGs 実行宣言の策定
目的	上記2題の特別講演を基調講演として、さらに各研究室・センター（16 施設）からの研究成果発表から、薬学系を統合した共同研究課題・実行宣言を策定した。
看護学研究科	
日時	令和2年11月11日(水) 13:00～14:45
講師	国立成育医療研究センター 研究開発管理部生命倫理研究室研究員 和泉澤 千恵 氏 東京医科歯科大学教養部 准教授 田中 智彦 氏
テーマ	看護における研究倫理 －人権擁護のあり方と利益相反について－
目的	看護学研究科における教員及び大学院生の研究活動の推進、及び大学院生の研究計画への教員の指導能力の向上を目的とした。大学及び病院等において倫理審査委員を務めている法律および倫理学の専門家2名を招き、看護研究における倫理のあり方と利益相反について学び、ディスカッションを通して、研究倫理を遵守した研究の実践能力及び研究指導能力の向上につなげる。

通信教育部 人間社会研究科	
日時	令和2年12月8日(火) 14:40～16:10
講師	通信教育部人間社会研究科 佐藤 裕之 研究科長・教授
テーマ	「特定課題研究演習」の現状と課題
目的	「特定課題研究演習」は必修科目であり、指導教員のもと、各院生が論文を作成するものである。その現状を振り返り、どのような課題があるのかを共有し、今後の指導に活かすことを目的とする。
通信教育部 環境学研究科	
通学制（環境学研究科）と合同開催	
通信教育部 仏教学研究科	
通学制（仏教学研究科）と合同開催	

令和2年度 FDSD 検討小委員会の活動

FDSD 検討小委員会メンバー

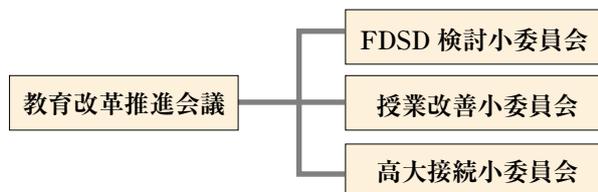
委員長	村松 陸雄	教務部長
	渡部 博志	キャリア開発部長
	伊藤 泰彦	学生部長
	高橋 大樹	経営学科 准教授
	三次 真理	看護学科 准教授
	今福 理博	幼児教育学科 講師
	和賀 信之	教育企画部長

FDSD 検討小委員会における審議事項

第1回：令和3年2月16日(火)

- 令和2年度 FDSD 活動の振り返り及び令和3年度 FDSD 活動計画について

教育改革推進会議小委員会設置状況



令和3年度 FDSD 活動計画について

1 令和3年度 FDSD 運営方針

◇学修者本位の教育へ転換

『何を教えたか』から『何を学び、身に付けることができたのか』への転換

◇学科・研究科主体のFD活動を推進

- ・『中長期計画』『出口保証』『教育の質保証』に対し、各学科・研究科が目標達成に向けた自由度と裁量を持ち、学科・研究科主体のFD活動を推進する
- ・各学科が4年に1度程度学生FDを実施し、学科内で学生の授業への主体的参加をより高めるための課題、ノウハウ、スキルを共有する

◇教員の主体的な参加を推進

教員の主体的な参加を推進するため、授業実施上の課題に対応するワークショップ形式の研修を推進

◇教員に必要な知識及び技能習得の推進

- ・大学方針説明会を年2回実施し、全教員に大学のビジョンや方針を共有する機会を設け、大学全体の機能強化を図る
- ・全教員が『建学の精神』『ハラスメント』『障がい学生の修学支援』等について理解を深めるため、3年に1度程度同テーマの研修を実施する

2 令和3年度実施計画（案）

全学 FDSD			
開催	テーマ	講師	備考
5月21日（金）	オンライン授業の効果的な実施方法について 数理・データサイエンス教育の推進（副専攻の導入）について	学内教員	創立記念日 （同慶節開催日）
9月21日（火）	響学スパイラルについて 外部アセスメントの今後の活用について	学内教員	後期大学方針説明会 予定日
12月予定	障がい学生の修学支援について（発達障がい・メンタルヘルスなど）	学外教員又は学内教員	
目的別 FDSD			
開催	テーマ	講師	備考
6月予定	情報セキュリティについて	-	e-Learning 研修
9月予定	ワークショップ型FD（テーマ：グループワーク、アクティブラーニング）	学外教員	
12月予定	SDGsについて	学外教員又は学内教員	
学科FD ※各学科の状況に応じてテーマを検討。以下は推奨テーマ案			
開催	テーマ	講師	備考
9月予定	学生FD	学内教員	各学科で設定
年度内	オンライン授業と対面授業の有効な実施方法について	学内教員	各学科で設定

世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World



Musashino University
武蔵野大学

武蔵野大学2020FDレポート

発行：武蔵野大学 教育企画部 教育企画課
発行日：令和3年7月5日
〒135-8181 東京都江東区有明3-3-3
TEL：03-5530-7729 FAX：03-5530-3812
E-mail：kaikaku@musashino-u.ac.jp
URL：https://www.musashino-u.ac.jp

